

三郷村の埋蔵文化財第2集

東小倉遺跡

1995・3

三郷村教育委員会

東小倉遺跡

1995・3

三郷村教育委員会



遺跡付近航空写真 円内は発掘調査地点



出土土器



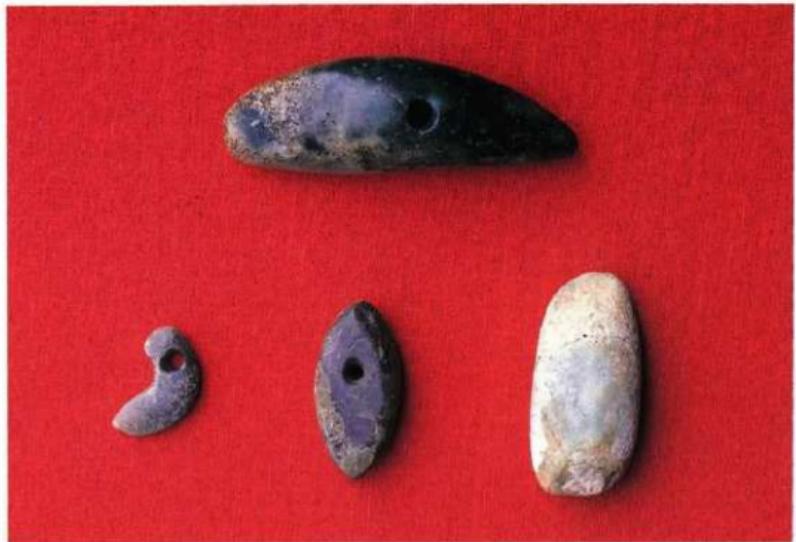
出土土器



三角墻土製品（既出）



石冠（既出）



玉類（既出）



土偶（既出）

序

東小倉遺跡は、縄文時代を中心とする包蔵地が集まる黒沢川流域の中でも最も下流に位置する遺跡で、かねてから土器、石器の密度の濃い散布地として知られており、三郷村でも最大級の縄文集落があった所とみられています。

そんな折、包蔵地内の畠より埋甕発見の一報があり、一帯が集落跡である可能性が高まりました。遺構が浅いことや学術性が高いことから、村の学術調査として発掘調査を実施することになりました。

発掘調査は平成5年5月21日から27日までの一週間実施され、縄文時代中期の竪穴式住居跡4戸、小竪穴1基、土坑2基などの遺構や、多量の土器、石器などの遺物が出土しました。

今回、部分的ではありますが、集落の一端が明らかになったことは、今後、郷土の歴史を研究する上で貴重な手掛かりを得たことにほかなりません。

しかしながら、三郷村には周知の遺跡の包蔵地が50か所近くありますが、これまでにまとまった発掘調査が行われたのは、今回の東小倉遺跡を含めて3件に過ぎません。一部は埋設保存されたところがあるものの、多くの遺跡がここ三十年ほどの開発行為の中で、何の調査、記録もされないまま消滅する、いわゆる遺跡破壊の憂き目にあったことは否めません。

私たちが住むこの地の一つひとつは、祖先たちが苦労の末開拓し、築き上げられたものです。先人たちの生活の様子を知ることは、今ここに居る私たちの足元を見つめることでもあります。

今回のような調査の機会を通じて、地域の歴史への関心や理解が深まり、文化財保護の意識が高まることを期待するものです。

最後になりましたが、急な発掘調査の日程であったにもかかわらず、全面的にご指導、ご協力をいただいた山田瑞穂団長を始めとする調査員の先生方、地主の堀内国利氏、調査協力者など関係の方々に心より感謝を申し上げるとともに、報告書作成に優秀な技術と誠意をもってあられた、藤原印刷㈱に対し厚く御礼を申し上げる次第です。

平成7年3月

三郷村教育委員会

教育長 藤松 潤之輔

例　　言

- 1、本書は、東小倉遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2、調査は、三郷村教育委員会が調査団を組織して実施した。
- 3、本書の編集は、那須野雅好と山田瑞穂が主として行った。
- 4、本書の執筆は調査団で決定した分担によって行い、各文末に氏名を明記することにより文責を明らかにした。
- 5、本書作成における分担は次の通りである。

遺構図整理・トレース………山田
遺物整理……………山田、島田、丸山、塙田、白山、妻
遺物実測・トレース………山田、高桑、島田
写真……………那須野（発掘調査）、青沼（遺物）
測量・実測図……………牧石、丸山

実測図等の縮尺は図に示してある。

- 6、土器の復原は、福沢幸一氏に依頼した。
記して感謝申し上げる。
- 7、調査の諸記録・実測図・遺物は、三郷村教育委員会において保管している。

本文目次

序

例言

第1章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査にいたるまでの経緯	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査の経過	3
第4節 調査の方法	5

第2章 東小倉遺跡周辺の環境

第1節 地理的環境と土層の状況	7
1、地形と地質	7
2、発掘地点の地形と地質	7
第2節 歴史的環境と村内の遺跡	9

第3章 遺構と遺物

第1節 調査された遺構と遺物	13	
1、第1号住居址	(1)遺構 (2)出土遺物	13
2、第2号住居址	(1)遺構 (2)出土遺物	19
3、第3号住居址	(1)遺構 (2)出土遺物	22
4、第4号住居址	(1)遺構 (2)出土遺物	26
5、小堅穴1	(1)遺構 (2)出土遺物	39
6、土坑1	(1)遺構 (2)出土遺物	43
7、土坑2	(1)遺構 (2)出土遺物	45
8、埋甕	(1)遺構 (2)出土遺物	48
9、土器片の入ったピット	(1)遺構 (2)出土遺物	49
10、集石1～8	(1)遺構 (2)出土遺物	51
11、遺構外出土遺物		56
12、遺跡出土の炭化物と焼骨について		56
第2節 東小倉遺跡既出遺物について	64	
1、有舌尖頭器		58
2、土器		59
3、石器		63
4、土製品		63
5、石製品		63
第4章 結語	68	

挿図目次

第1図 東小倉遺跡の調査範囲と造構全体図	6
2 土層概念図	8
3 土層柱状図	8
4 三郷村の遺跡分布図	10
5 東小倉遺跡第1号住居址実測図	14
6 東小倉遺跡出土土器実測図(1)	15
7 東小倉遺跡出土土器実測図(2)	16
8 東小倉遺跡第1号住居址出土土器拓影(1)	17
9 東小倉遺跡第1号住居址出土土器拓影(2)	18
10 東小倉遺跡第2号住居址実測図	20
11 東小倉遺跡第3号住居址実測図	22
12 東小倉遺跡第2号住居址出土土器拓影	23
13 東小倉遺跡第2・3号住居址出土土器拓影	24
14 東小倉遺跡第3号住居址出土土器拓影	25
15 東小倉遺跡第4号住居址実測図	27
16 東小倉遺跡第4号住居址出土土器拓影(1)	29
17 東小倉遺跡第4号住居址出土土器拓影(2)	30
18 東小倉遺跡第4号住居址出土土器拓影(3)	31
19 東小倉遺跡第4号住居址出土土器拓影(4)	32
20 東小倉遺跡出土石器	33
21 東小倉遺跡出土石器(打製石斧)	34
22 東小倉遺跡出土石器(打製石斧)	35
23 東小倉遺跡出土石器(打製石斧)	36
24 東小倉遺跡出土石器(打製石斧)	37
25 東小倉遺跡出土石器(凹石、石皿)	38
26 東小倉遺跡小堅穴1、土坑2、土器片の入ったビット実測図	39
27 東小倉遺跡小堅穴1出土土器拓影(1)	40
28 東小倉遺跡小堅穴1出土土器拓影(2)	41
29 東小倉遺跡小堅穴1出土土器拓影(3)	42
30 東小倉遺跡土坑1実測図	44
31 東小倉遺跡土坑1出土土器拓影(1)	46
32 東小倉遺跡土坑1出土土器拓影(2)	47
33 東小倉遺跡埋甕と配石実測図	48

34	東小倉遺跡土器片の入ったピット出土土器拓影	50
35	東小倉遺跡集石1～8実測図	51
36	東小倉遺跡集石出土土器拓影(1)	54
37	東小倉遺跡集石出土土器拓影(2)	55
38	東小倉遺跡遺構外出土土器拓影	57
39	東小倉遺跡既出土器拓影(1)	60
40	東小倉遺跡既出土器拓影(2)	61
41	東小倉遺跡既出土器拓影(3)	62
42	東小倉遺跡出土石製品実測図	64
43	東小倉遺跡出土土偶実測図	65
44	東小倉遺跡出土土製品実測図	66
45	東小倉遺跡出土有舌尖頭器実測図	58

図 版 目 次

- 図版1、遺跡の遠景と近景
- 図版2、第1号住居址及び炉址
- 図版3、第3号住居址及び第4号住居址埋甕出土状況
- 図版4、屋外埋甕
- 図版5、土坑1と集石6
- 図版6、出土土器
- 図版7、出土土器及び出土土偶他
- 図版8、土偶（既出土偶）
- 図版9、出土石器（有舌尖頭器、石鐵他）
- 図版10、出土石器（打製石斧、凹石他）
- 図版11、出土石器（石棒、打製石斧、磨製石斧他）
- 図版12、土製品及び石製品（三角墻土製品、石冠、垂飾）
- 図版13、出土石器（打製石斧）
- 図版14、出土石器（磨製石斧、凹石）
- 図版15、出土石器（磨石、敲石）
- 図版16、出土石器及び石製品（石皿、石棒）

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまで

東小倉遺跡は黒沢川橋の左岸一帯に広がる遺跡で、縄文時代中期の土器や石器の密度の高い散布地として知られていた。年代的に南松原遺跡の方が古く、勝板式土器の集落であるのに対し、今回の東小倉遺跡は加曾利E式土器の集落で、縄文時代中期後半の遺跡である。

平成5年2月19日、東小倉地区・堀内国利氏から埋蔵文化財遺物出土の連絡あり、現地を確認した。堀内氏の宅地の北側に隣接する畠2237m²を耕作していた際発見したとのことで、畠の中央東よりの、表土から深さ20~30cmくらいのところに直径30~50cm程の石が3個確認された。そのうちの一つを上げてみると、土器が埋まっているのが確認できた。

早速、県教育委員会文化課と協議のうえ、2月26日に埋蔵文化財保護協議会がもたれ、現地調査を行った。

その結果、堀内氏が掘り当てたのは明らかに家の跡で、石は炉石か、「埋甕」で家の入り口と推定された。また、堀内氏は、これまでの耕作に伴って出土した多くの遺物を保管しているので、遺物の保管と、現地の保存をお願いした。

保護協議の結果、次のような理由から、村単独の学術調査とし、補正予算を要求して、早期の発掘調査を目指すこととなった。

1. 埋設保存が最も望ましいが、発見された遺構が非常に浅く地表から20~50cm程の深さである。これまでの手による耕作でも多くの遺物が出ており、トラクターなどの農耕機械が入っただけでも遺跡が破壊される恐れがある。
2. まれに見る縄文集落のあったところとみられ、南安曇郡下でも最大級の縄文遺跡で、学術的価値が高い。
3. 堀内氏の所蔵する遺物の中に非常に貴重なものがあり、遺構と結び付けて検討する価値がある。
4. 当面の方向として①4年度から5年度の初めに1週間位で発見箇所周辺の発掘調査を計画する。(補正予算を要求) ②体制を整える(専門者の依頼、教育委員会内の体制づくり、協力者を募る…発掘に携わる人) ③この調査の結果を見て、内容、規模などにより補助申請(詳細分布調査)を検討する。

三郷村教育委員会では、この結果を受けて、梓川村在住で前回の黒沢川右岸遺跡調査でもお世話になった山田瑞穂先生をお願いし、調査団を組織した。作業員の確保の都合や梅雨時前をにらんで、できるだけ早い機会を設定することとなった。

第2節 調査体制

調査団長 山田瑞穂（日本考古学協会員・前池田小学校教頭）

調査員 降旗 俊行（長野県考古学会員・社会保険事務所）

青沼 博之（日本考古学協会員・埋蔵文化センター佐久・上田調査事務所長）

小林 康男（〃 平出考古博物館長）

島田 哲男（〃 大町市教育委員会）

桐原 健（〃 元長野県史常任編纂委員）

樋口 畏一（〃 長野県埋蔵文化財センター参事）

神沢昌二郎（〃 松本市中央公民館長）

高桑 俊雄（長野県考古学会員・(財)松本市教育文化振興財団職員）

小松 牧俊（三郷村文化財保護審議委員 臨時委員）

森 義直（元県立大町高校教諭）

丸山 恵子

事務局 磯野 晨（教育委員会・教育次長）

赤羽 篤（〃 社会教育係長）

生松 文子（〃 学校教育係長）

那須野雅好（〃 主事 文化財担当）

牧石 正明（〃 主事）

堀 敦子（〃 主事）

小穴 哲丸（〃 主事）

清水 愛子（〃 主事）

福嶋 瞬（〃 社会教育指導員）

中村れい子（〃 〃 〃 〃 ）

発掘調査協力員（順不同）

堀内国利、降旗政人、丸山善太郎、宮沢正昭、中村太一、久保田育美、藤松鴻之輔、布山順子、堀 みのり、金城 静、塙田美恵子、横山従之、横山製菓、内山教子、臼山たみよ、手塙隆義、中澤金寿、小松 淳、堀 充、加料正基、赤澤幸利、二木隆美、降旗敏夫、丸山美和子、宮沢賢二、二村 汎、長崎 弘、宮沢慎二、小松久芳、中田 徹、本田 明、

遺物整理協力員

堀 みのり、塚田美恵子、白山たみよ、丸山恵子、内山教子、

第3節 調査の経過

発掘作業

平成5年

5月19日（水）晴れ

- ・調査準備

現地へ資料運搬、天幕を張り、用具を入れる。午後山田先生の指導のもと、南北へ延びる2m幅のトレンチ3本の位置を決める。杭打ち、テープ張り。

5月21日（金）晴れ

- ・発掘調査開始の会

- ・Cトレンチ掘り

- C2区、土器片多く、落ち込みがありそうなので、C1、C3区に拡張、掘り下げ作業。
・Bトレンチ堀り B6区、土器片多く出土し、落ち込みがありそうなので、B7区を掘り下げ作業。
・Aトレンチ、埋甕周辺の拡張作業。

5月22日（土）曇り時々雨

- ・作業開始後まもなく降雨。作業継続中に止む。

- ・C1～3区の落ち込みは、住居址になるらしいので、拡張して掘り下げ検出にあたる。完形の石鎌出土。土器片の出土多い。午後になって石囲い炉が確認されたので、第1号住居址とする。

- ・A13～C13列を掘り下げ、土層観察用にする。B13～C13区に土器片の出土多く、遺構が考えられるので検出作業。

- ・B6～7区拡張し、掘り下げ作業。土坑となり、中に遺物が入っている。

- ・Aトレンチ掘り

- A1～4区、土器片が多く出土するので拡張作業。打製石斧、石鎌の出土がある。
・C20地区を中心に土器片の出土多いので拡張作業。
・午後3時45分、降雨のため作業中止。

5月23日（日）晴れ

- ・ 第1号住居址検出作業

西部に集石が検出される。住居址埋没後につくられたもので、住居址に後続するもの。

- ・ C19～21区の拡張作業

落ち込みが咬み合っていて遺跡の重複が考えられる。両刃の小型磨製石斧が出土する。

- ・ A1～4区、土器片が多く出土するので拡張作業継続。ヒスイ原石の出土がある。

- ・ B13～C13列の拡張作業

炉址の確認はまだあるが、柱穴らしきもの2箇所検出する。遺物出土多い。

- ・ 埋甕周辺、住居址になるか。検出作業

炉址、柱穴等確認できず。住居址にはならない。平面図、断面図とりと写真撮影。埋甕は見学者のために取り上げず、詰め物をして残しておく。

- ・ 現地指導見学者 直井雅尚氏 大町市役所 西沢秀一氏

5月24日（月）曇り

- ・ 第1号住居址検出作業

壁と床面の確認中、東側に平石と埋甕が発見される。西側の集石は八箇所となり1～8と呼称し、図をとり、写真撮影をすませて1号住居址の検出にあたる。西部床面には更に落ち込みが確認され、住居址の重複がみられるが、用地外となるため調査不能。

- ・ 第2号、第3号住居址検出作業

B13～C13列の土器片集中部に床面らしき堅い面が見られ、2箇の柱穴が確認されたので第2号住居址とする。その下に更に床面があるので第3号住居址とする。2号住居址は耕作による擾乱が激しい。

- ・ C19～21区拡張、遺構の検出作業

擾乱が甚だしく住居址のプラン等確認されるかどうか難しい。

- ・ A1～5区拡張、遺構の検出作業

A1～2の落込みを土坑2、A3～4の落ち込みを小窪穴1とする。

5月25日（火）晴れ

- ・ 第1号住居址検出作業

作業終了。清掃、実測へ。

- ・ 第2号、第3号住居址検出作業

第2号住居址作業終了。清掃、実測、写真撮影。引き続き、重複して真下にある第3号住居址検出作業

C19～21区拡張、遺構の検出作業の結果、西側壁が確認されたので4号住居址とする。壁の北側に平石の上に伏せた形の埋甕が発見される。

- ・ 土坑2、小豎穴1の検出作業

5月26日（水）晴れ

- ・ 第1号住居址
清掃、実測、写真撮影
- ・ 第3号住居址検出作業
2号住居址床面下に地山である褐色土を床面にし、中ほどに炉、4主柱穴が確認された。
清掃、写真撮影、実測。
- ・ 土坑1検出作業
清掃、写真撮影、実測。穴の中には、立った状態の火熱を受けた砂岩が南壁中程にあり、
漆黒色土がみられる。小形定角式磨製石斧、石棒、骨片、コナラ、カヤの炭化材と共に多量
の土器片が出土する。
- ・ 小豎穴1、実測
- ・ 土坑2、実測
- ・ 森 義直先生、地形、土層等調査。

5月27日（木）晴れ

- ・ 第1号住居址 埋甕取り上げ
- ・ 第3号住居址 精査
- ・ 埋甕取り上げ
- ・ 200分の1 測量
- ・ 出土遺物整理、資材撤収
- ・ 三郷村小学校6年児童見学
- ・ ビデオ撮影

遺物整理作業

5月31日（月）～7月11日（月）22日間

場所 小倉多目的研修集会施設

第4節 調査の方法

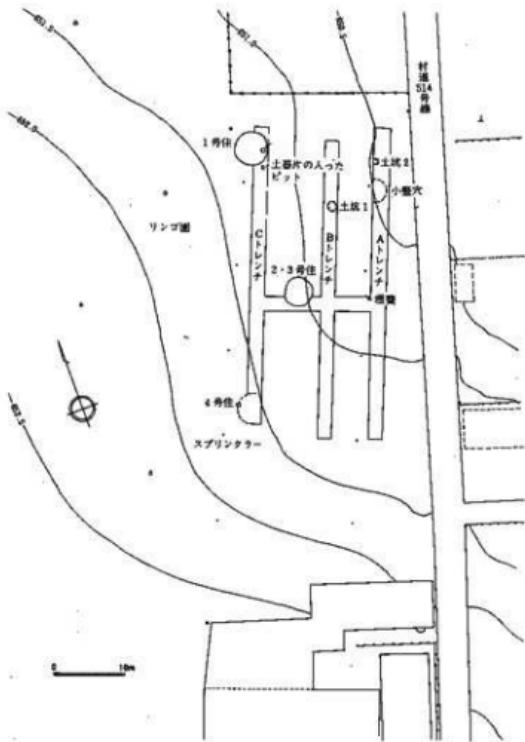
遺跡の状況などが不明なので、調査地区全体にかかるように南北に延びる幅2mのトレンチ(A・B・C)3本を設定し、遺構の分布状況及び土層の状況を把握することにした。ただし、現地南側はすでに耕作し作物が植えられていたので、調査地区から除外した。

作業はA～Cのトレンチに手分けで入り、一区画おきに掘り下げ、遺構の確認につとめた。また、埋甕周辺は住居址の可能性が高いので集中的に対応した。その結果、Cトレンチ北側では住居址に結びつく手がかりを得ることができたものの、全体的に耕作等による遺構の擾乱が激しく、明確な遺構切り込み面がつかめない現状が判明した。

この結果をもとに、住居址検出の可能性が高い埋甕西側よりCトレンチまで拡張トレンチを設定した。

トレンチにかかった遺構については、その周囲を拡張することによって、遺構全体を調査するとともに、切り合う遺構の有無を確認した。したがって結果としては調査地区の全体に手が及んだと考えたい。その結果、第1図にみるような遺構の検出を得た。

測量は平板測量を原則とし、一部造り方測量を用いた。また各トレンチは、2mごとに区切つて番号を付すことにより、測量と遺物の取り上げの基準とした。



第1図 東小倉遺跡の調査範囲と遺構全体図（1：800）

第2章 東小倉遺跡周辺の環境

第1節 地理的環境と土層の状況

1. 地形と地質

本遺跡は、松本盆地の西山麓に近く、黒沢川と一部鳴沢川により形成された合扇状地上にあり、黒沢川の浸食の結果、現黒沢川の左岸、比高は約5m、標高650m～652mの黒沢川段丘面上にある。

この付近は隣接して鳥川扇状地、その北には中房川扇状地など、フォッサマグナ西縁の山麓沿いに数多くの扇状地が分布しているが、これ等扇状地の基底となっている疊のうち、安曇野北部は高瀬川によるものであり、安曇野南部の黒沢川や鳥川などの基底は梓川による疊である。

松本盆地が更新世の中頃陥没で形成されて後、梓川により砂礫が厚く堆積し、一方黒沢川や鳴沢川も梓川扇状地上に土砂を堆積させて小扇状地を形成し、更新世末の乗鞍火・山灰によるローム層がこれ等の扇状地を覆っている。(第2図)

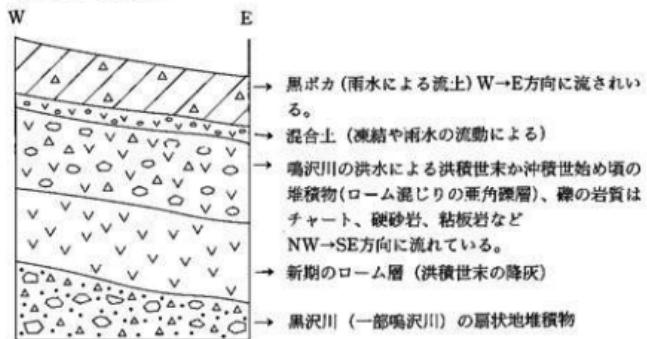
本遺跡と直接関係のある黒沢川は、標高2051mの黒沢山の南から流下する南黒沢と、北から流下する北黒沢が、幾つかの沢と合流しながら梓川村中塔の東およそ500m付近で合流し、三郷村住吉神社方向へ流れている。近世初頭の河川改修により、これから先は流路が変わるが、扇状地の末端は一部豊科町の上鳥羽付近の岩岡面にまで達している。黒沢川扇状地は、黒沢川橋の下流、標高640mを境にして堆積状態が異なり、これより上流では、西側の山地の隆起運動の影響を強く受けて扇状地も隆起し、その分だけ黒沢川による下刻作用も進み、段丘崖を形成するに至っている。640m付近より下流では、側方浸食も盛んで川巾も広く、氾濫をくり返えし梓川の影響を受けて左折している。

堆積物は、中・古生層の岩盤の上に、乗鞍の輝石安山岩を含む梓川の円礫が厚く堆積し、その上に御岳起源のロームが、黒沢川の古期堆積物と互層をなして載っている。この上を黒沢川の新しい堆積物が覆い、このため、上野段丘面は上長尾付近で黒沢川扇状地に没している。最上部は乗鞍火山灰によるローム層が約3mの厚さで覆い、洪水により上部はロームと砂礫が混合して遺跡付近の地山となっている。

2. 発掘地点の地形と地質 (第3図)

本遺跡は、黒沢川橋の北西200m付近の標高650m～652mの間にあり、扇面は東に向かって緩く傾斜している。この付近の堆積物の主体は、黒沢川のものであるが、西北西から鳴沢川の小扇状地が迫り、本遺跡を含む東小倉一帯は両者の接点となっている。黒沢川と一部鳴沢川の堆積物の上に、前記乗鞍起源の新期ロームが最大で3m程載り、その上に更新世末～完新世(沖積世)の鳴沢川の洪水によって西→東へ運ばれた角礫混じりの

第2図 土層概念図

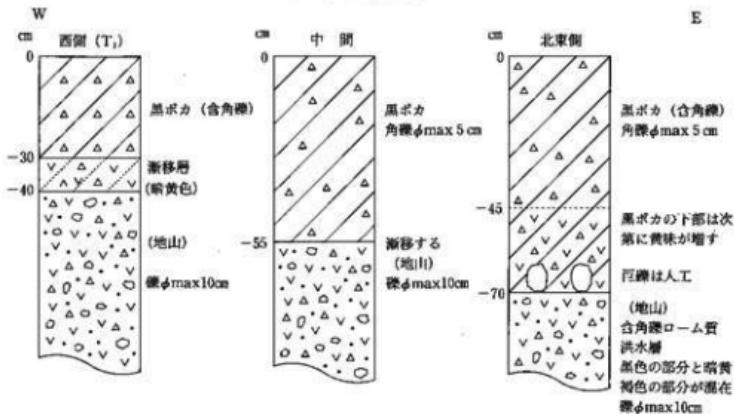


二次堆積ローム質層が載っている。上部は有機物により、含角礫黒ボカ土となり、雨水の作用で次第に標高の高い西から低い東へと移動が行なわれている。この二次堆積層は、洪水時のふるい分け作用により、殆んど砂礫層といえる程ローム質の少ない部分も塊状になって存在し、一方、有機物の多い部分は黒く染まっているなど、地山の土層は変化に富んでいる。更に、洪水堆積のため微地形も凸凹が激しくなっており、縄文当時の生活面は現在見る地形よりも起伏が多かったことを物語る。この縄文面(二次堆積物の上面)を、雨水により運ばれた含角礫黒ボカ土(耕土)が覆っているが、地山に起伏があるため西側が約30cmと浅く、北東の隅で約70cmと深くなっている。

なお、表土の黒ボカ土と地山の含角礫ローム質層の境は、冬期の凍結や雨水の流動などにより混合し、はっきりしない所も多くみられ漸移層となっている。更に、果樹を植える際に生じた上下の土の移動も各所に認められる。

(森 義直)

第3図 土層柱状図



地山の含角礫ローム質洪水層は砂礫の多い部分やローム質に富む部分など変化が多い。礫の岩質はチャート、硬砂岩、粘板岩などである。

第2節 歴史的環境と村内の遺跡

第4図でみると、本村には現在迄に、47箇所の遺跡が確認されている。そしてその分布は、山麓沿い、黒沢川沿い、鳴沢川沿い、段丘下の水田地帯の4地帯に濃厚にみられる。段丘下の水田地帯は、平安期の遺跡が多いが、他は縄文期の遺跡が圧倒的に多いという特徴を示している。

今回、調査の実施された東小倉遺跡は、黒沢川沿い（黒沢川左岸）に所在し、広範囲にわたって縄文時代前期・中期・後期の遺物を出土することで周知された遺跡の一つであった。黒沢川沿いの遺跡は、上流から左岸では、黒沢浄水場東、南松原、本遺跡、三角原の各遺跡が、右岸では、押込（梓川村中塔）、長者屋敷（梓川村境界）、稻荷西、調整池北、黒沢川右岸、チングラ屋敷、若宮、堂原等の各遺跡が続いている。黒沢川は現在は住吉神社西方で終わり、堰に接続するという珍しい川であるが、かつての氾濫原というか流路の延長である上長尾、榎、住吉の各地区に存在している各遺跡も黒沢川沿いの遺跡と呼んでもよいと思われる。昭和24年の検道下遺跡（当時は木造跡と呼ぶ）の発掘調査では黒沢川の小自然流を示すかのような堆積物が観察されている。

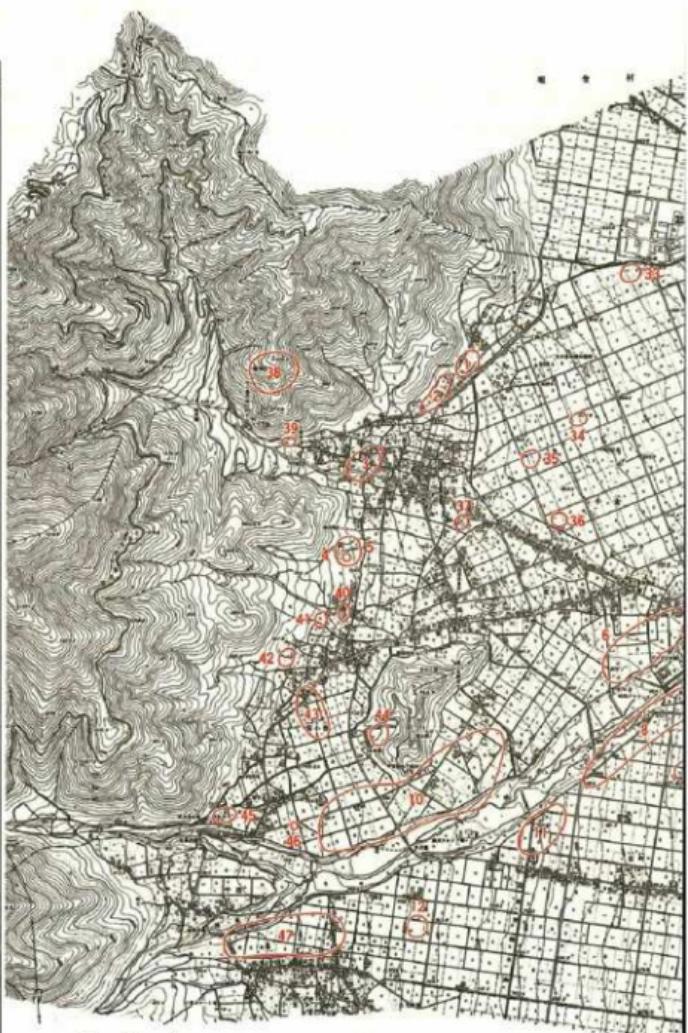
この黒沢川周辺に人々の往来があったのは先記遺跡の内容から考えて縄文時代早期格円押型文土器を持った人々の稻荷西遺跡への訪れにまでさかのぼると考えられていたが、今回の調査で草創期にまでさかのぼることが判明した。（後述）。次いで縄文前期には、本遺跡をはじめ、調整池北、黒沢浄水場東、黒沢川右岸（特別養護老人ホーム）に生活の場を残している。特に、本遺跡の対岸に当たる黒沢川右岸遺跡は、昭和58年に発掘調査が実施され、住居址と小堅穴を検出している。出土土器は絡条体压痕文土器や織維を含む縄文土器、薄い器厚の条痕文土器等であることから、縄文早期末から前期初頭に比定される内容である。黒沢浄水場東遺跡は、縄文前期末の下島式土器を出土する小範囲の遺跡であったが圃場整備事業で消滅してしまった。黒沢川沿い以外では、鳴沢川右岸に位置する北小倉の才の神遺跡が注目される。有尾式、北白川下層式の前期土器を出土する他に、後期、晩期までの内容をもつ遺跡として、三郷村はもとより南安曇郡下でも特筆される遺跡である。

縄文時代中期になると黒沢川沿いは最盛期を迎える。本格的な村作りが始まって、その集落が、長者屋敷、南松原、そして本遺跡にみられる。南松原遺跡は、昭和45年に発掘調査され、遺跡範囲の一部分の調査であったが、14軒の堅穴住居址の確認があった。広範囲からの遺物出土があるので規模の大きい集落が考えられる。勝坂式土器が中心を占めることから、本遺跡で今回調査されたものより先行する内容をもった遺跡といえる。黒沢川右岸遺跡からは本遺跡と同時期の堅穴住居址を検出している。鳴沢川沿いにも中期遺跡があり、三郷村で11箇所が数えられ、一番遺跡の多かった時期である。

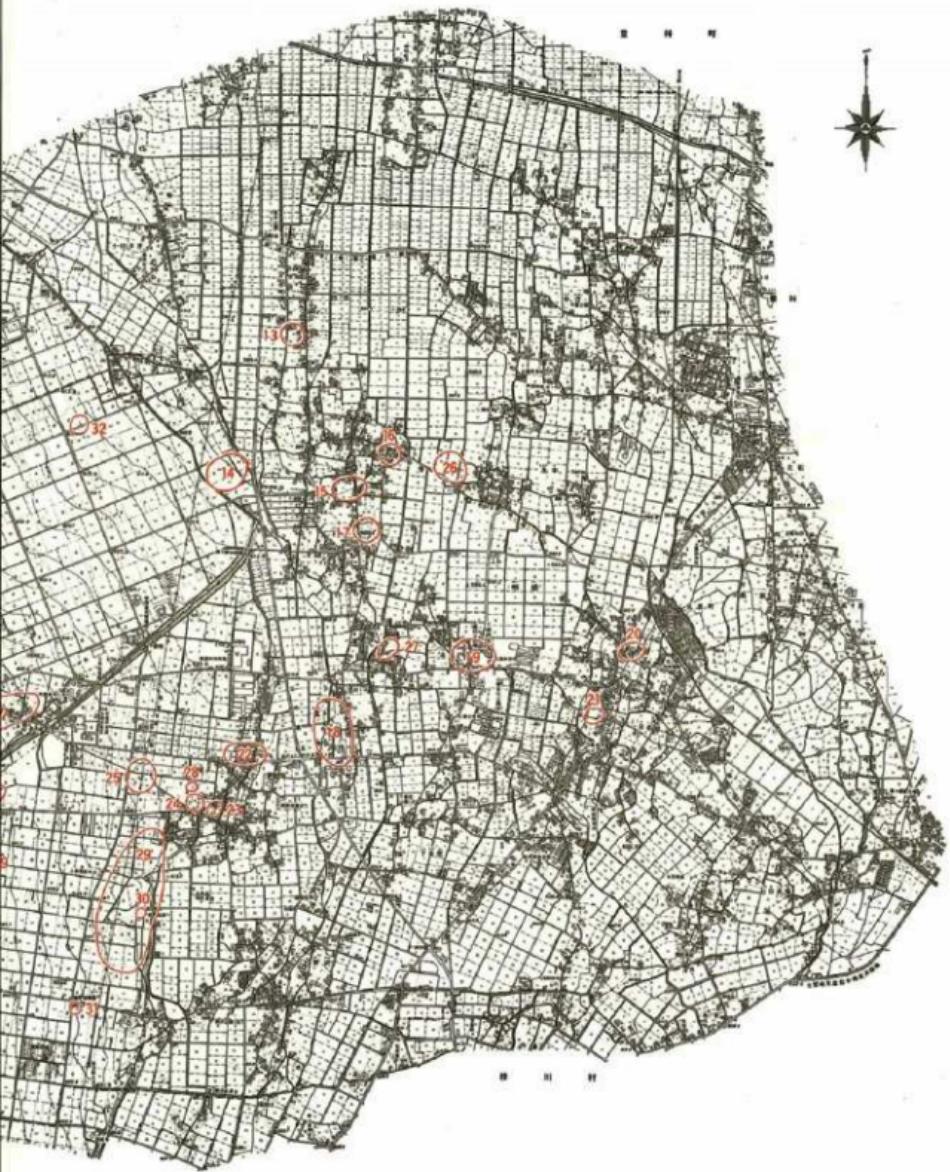
縄文後期になると本遺跡の他に、才の神、鳴沢、地蔵沖、榎小路の各遺跡が、そして晩期に

平成3年12月制作

番号	時代	名 称
1	縄文	一本松遺跡
2	〃	鳴沢遺跡
3	〃	才の神遺跡
4	古墳時代以降	淨心寺南塚
5	縄文・歴史時代	淨心寺附近遺跡
6	縄文	東小倉遺跡
7	古墳	アルブス学園前古墳
8	縄文・弥生	黒沢右岸遺跡
9	縄文・弥生	チンカラ遺跡
10	縄文	兩松原遺跡
11	〃	調整池北遺跡
12	〃	種荷西遺跡
13	縄文・古墳	丁田遺跡
14	古墳	三角原遺跡
15	〃	中村遺跡
16	縄文	榆小路遺跡
17	土師	植上手遺跡
18	土師	栗の木下遺跡
19	土師以降	三柱神社東遺跡
20	縄文	白山神社根遺跡
21	〃	一日市壇御便局南遺跡
22	土師	上越屋敷遺跡
23	弥生	川岸慈氏宅地遺跡
24	弥生・古墳	堂房遺跡
25	土師	若宮遺跡
26	平安以降	道下遺跡
27	歴史時代	坂がいと遺跡
28	古墳	平福寺附近古墳
29	縄文	長尾城址北遺跡
30	歴史時代	長尾城址
31	縄文	赤坂西遺跡
32	〃	往吉竹跡遺跡
33	〃	鳴沢尻遺跡
34	〃	西牧遺跡
35	〃	地蔵沖遺跡
36	弥生	大堀遺跡
37	土師	堤尻遺跡
38	歴史時代	小倉城址遺跡
39	古墳	北小倉1号・2号塚
40	弥生	堂星遺跡
41	土師	山の腰遺跡
42	縄文	大日堂北遺跡
43	土師以降	中沢遺跡
44	縄文	ゆの久保遺跡
45	〃	黒沢淨水場東遺跡
46	古墳	富士塚
47	縄文	長者屋敷遺跡



第4図 三郷村の遺跡分布図



三郷村教育委員会

1:20,000

なると更に数が減って本遺跡と才の神遺跡が知られるだけである。全盛を極めた中期文化も次第に衰退の様相を示していることが遺跡数の上からも示されたといえよう。この現象は全県的な傾向であり、涼冷化する気候が大きく影響しているものと考えられる。三郷村の後・晚期は、上記遺跡からの散発的な土器片の出土があるだけで、その生活内容等を知る資料は今のところ得られていない。

次いで弥生時代を迎えると南安曇郡下では他地域に先がけて黒沢川右岸、堂原の両遺跡にその文化の伝来をみている。黒沢川右岸遺跡の昭和58年の発掘調査では、弥生中期の堅穴住居址を2軒検出しておき、弥生文化の波及を考える上で貴重な遺跡となっている。しかし後続せず、短期間の居住で終わってしまっている。そしてこの黒沢川右岸遺跡を最後にして上流域では遺跡がみられなくなるが、古代に至って下流域の三角原、櫛小路、櫛中村、櫛上手、櫛道下、住吉丁田等に人々の居住がみられるようになる。水田地帯となっている沖積地であるが、黒沢川の川尻に当たり、黒沢川の小支流を利用しての生活であったものと考えられる。これらの遺跡は平安期の遺物を出す遺跡が多く、長尾・栗の木下遺跡や坂がいと遺跡等を含めて、住吉庄開発の歴史を考える上で大切な遺跡群となろう。

また本遺跡の範囲内であるアルプス学園前に古墳と呼んでよいのか躊躇するような小古墳があり、昭和25年に調査されている。石室は1m程度のもので2個の石が残っていたのみで、出土遺物等は不明である。

以上、東小倉遺跡の所在する黒沢川沿いの遺跡を中心に列記したが、先記のように三郷村では遺跡の密集する地域である。これは黒沢川の水が人々の生活にとって必要なものであったり、両側に展開する広大な扇状地は食料獲得の地として極めて重要であったからであろう。特に採集生活を中心とする縄文時代にあっては、そのことが強くうかがわれる。しかし稻作りを中心とする弥生時代以降にあっては、多孔質の扇状地は水もちが悪くて水田耕作には適さないため、順次沖積地への進出となったのである。

(山田瑞穂)

第3章 遺構と遺物

第1節 調査された遺構と遺物

1. 第1号住居址

(1) 遺構(第5図、図版2)

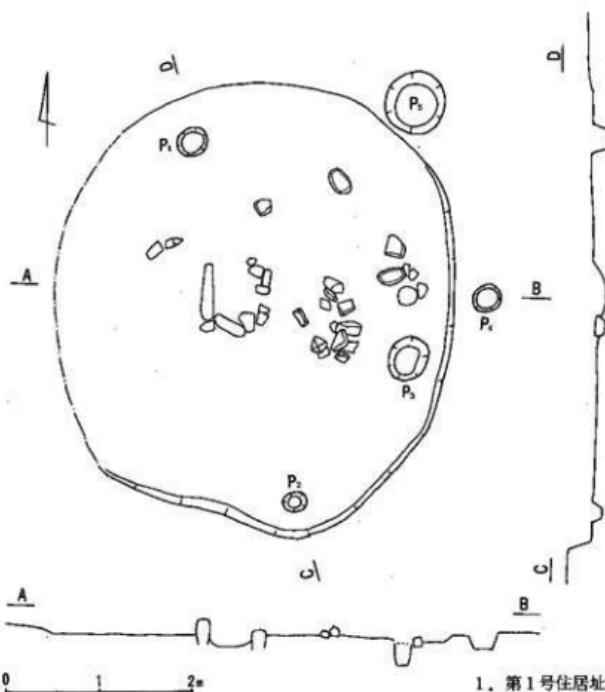
本址は今回の調査区では最北西端に位置し、微地形的には一段高い西側に確認されたものである。CT1区、3区の掘り下げ中に土器片の出土が多かったため2区もつなげて掘り下げたところ、住居址東側の落ち込みを認めたので、更に北側と西側へは隣のりんご園境まで拡張して本址の検出作業に当たった。しかし、掘り下げ作業が進むにつれて、西側及び南側には散水施設の配管埋設があって攪乱されていること、西側には本址埋没後に集石が作られたこと等が判明し、本址露呈までに困難点が多かった。そして西側には更に住居址の切り合いがあるため、本址西壁の確定は困難であった。

検出された本址は、南北で4.8mほどの規模をもつ円形プランの竪穴である。周壁は南側で25cm、北側で5cm、東側で10cmの高さを測るが、西壁は把握できなかった。床面上の施設としては、柱穴、炉址、埋甕が検出された。床面は礫を含んだ黄褐色土で、かなり堅い部分が形成されていた。炉址は、中央辺に位置する石囲い炉である。炉縁石は北側に一部欠けているところがあるが、一辺約80cmに並べられ、方形を呈している。西側には、熱を受けてひびの入った長さ53cmの細長い石が据えられており、その南、すなわち南西コーナーには一辺12cmほどの立石がある。炉内にも石の落ち込みがあり、底面には焼土がみられた。そして炉の北側及び西側で多くの土器片がみられた。柱穴と思われるものが住居址内に3個確認され、P₁は径35cmで深さ20cm、P₂は径22×27cmで深さ10cm、P₃は径48×42cmで深さ30cmを測る。配置状況からみて西側にも柱穴が予想されるが攪乱等で確認し得なかった。また壁外にP₄(径30cm、深さ20cm)とP₅(径70cm、深さ45cm)が存在したが、本址に伴うものかどうか判断に苦しむ。P₅は発掘時の土層から考えると新しいもののように観察できた。埋甕は東壁より40cm入ったところに口縁部を欠いた深鉢形土器が正位の状態で埋められていた。すぐ北には径30cmほどの平石が傾いた状態で検出された。おそらく埋甕の石蓋として使われたものと思える。また埋甕と炉址の間の床面上には自然石の投げ込みがみられた。精査したが周溝等は確認できなかった。埋甕は曾利IV式期に比定されることから、本址の時期もそこにおくことができよう。なお埋甕内の土は精査したが、何も見当たらなかった。

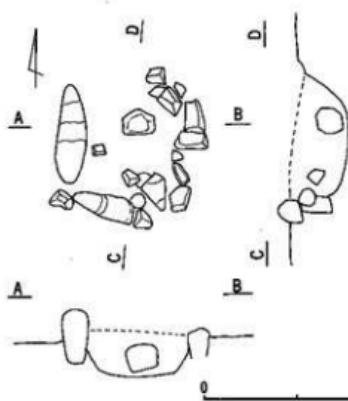
(2) 出土遺物

本址よりの出土遺物には、土器、石器がある。

土器(第6図1～3、第8図、第9図)は器形の判明するものが3個ある。第6図1(口絵、図版6)は釣手土器の範疇に入るものの、口径25cmほど、底径8.2cm、高さ12.5cm(把手を含め

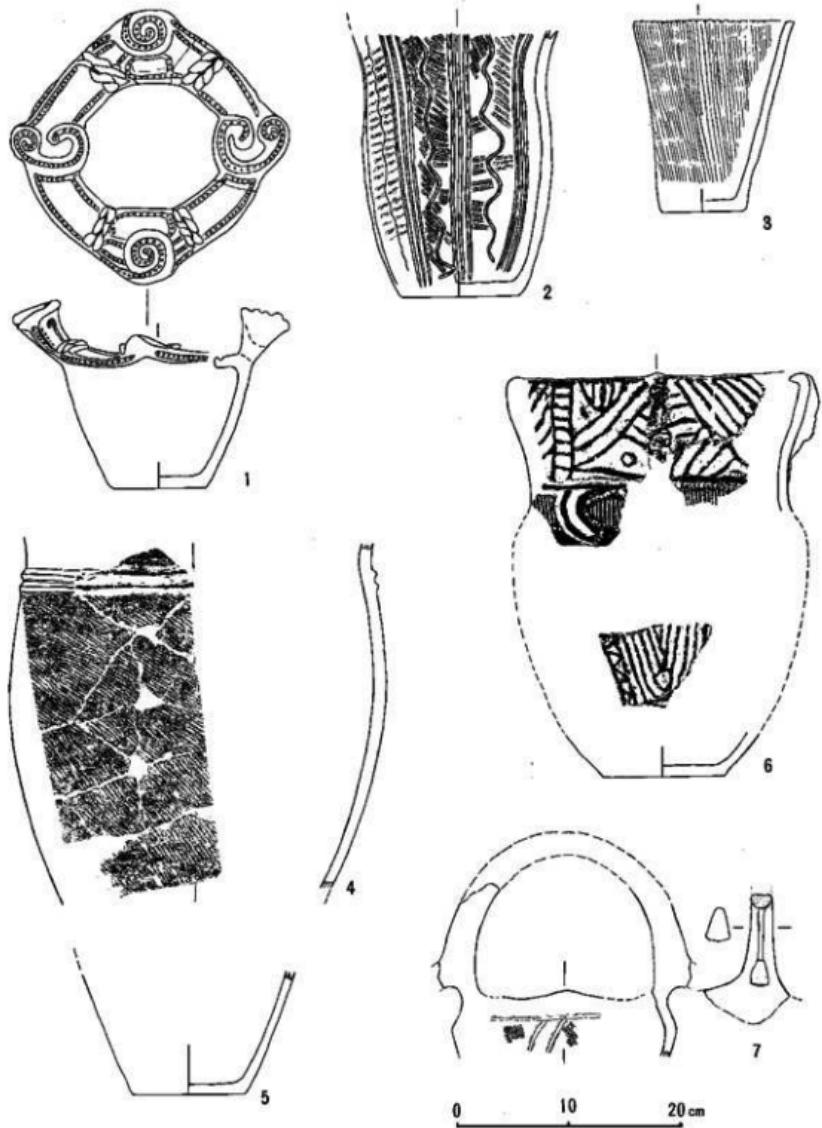


1. 第1号住居址実測図 (1 : 60)

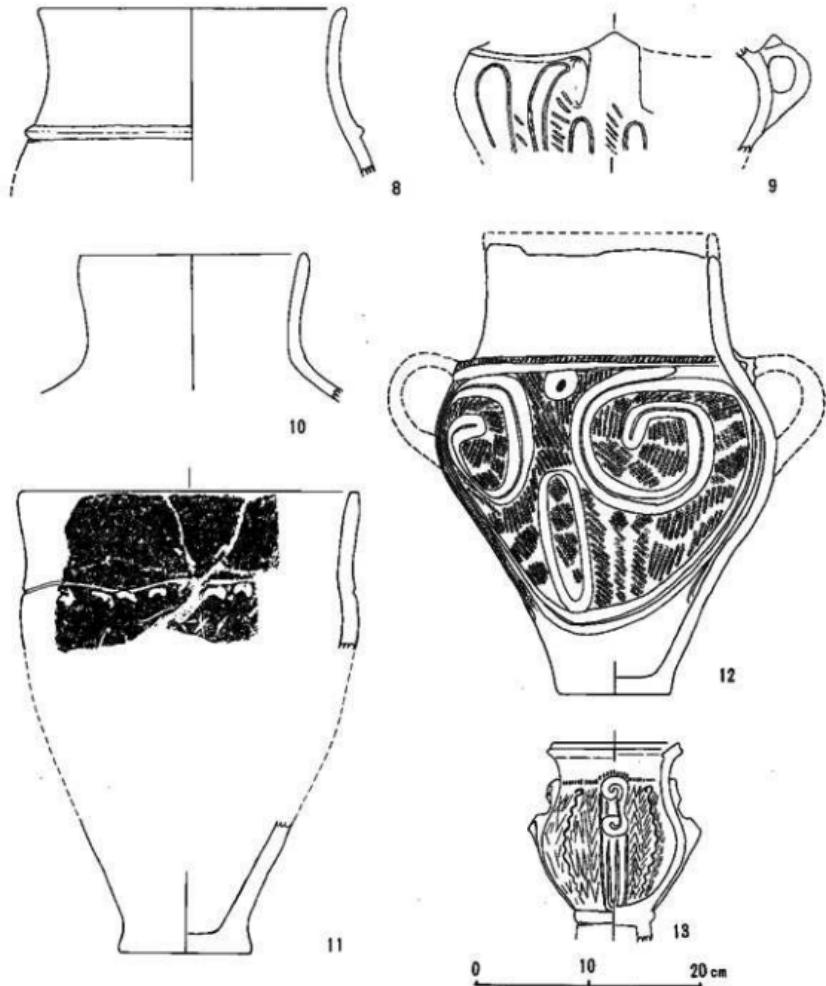


2. 第1号住居址炉址実測図 (1 : 30)

第5図 東小倉遺跡第1号住居址実測図



第6図 東小倉遺跡出土土器その1 (1:5)
 (1・2・3:1住, 2は埋甕, 4・5・6:4住埋甕, 7:小堅穴1)

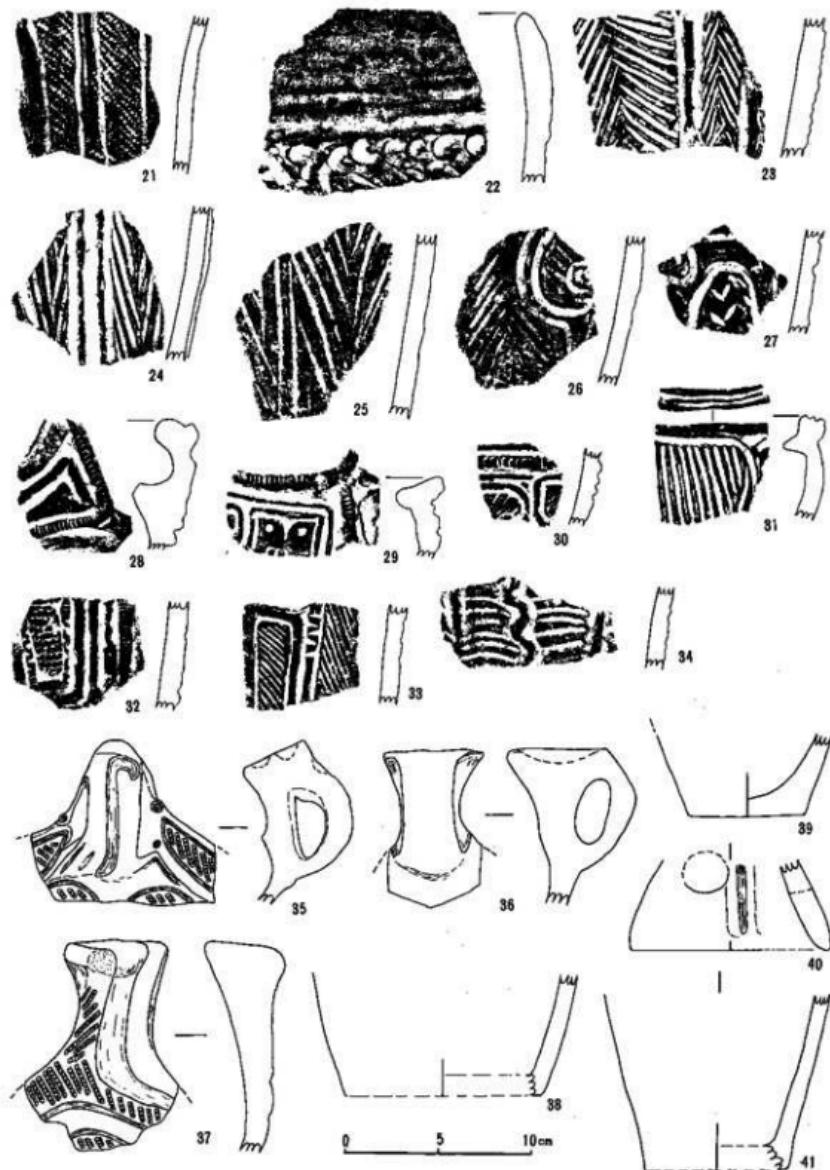


第7図 東小倉遺跡出土土器その2 (1:5)
(8・9・10・11:土坑1, 12:埋甕1, 13:集石6)

ると15.5cm)ほどを数える。文様は口縁部に集中し、それ以下は無文である。文様は渦巻状のものが左右対称に付き、把手部でない方の両側に縄状に粘土を貼ってある。そしてそれぞれの区間を凹線で区画し、刺突文を施している。上から見ると口唇部は八角形を呈する形になって



第8図 東小倉遺跡第1号住居址出土土器拓影その1 (1 : 3)



第9図 東小倉遺跡第1号住居址出土土器拓影その2 (1:3)

いる。表面はざらついた感じであり、胎土に雲母を含んで光っている。茶褐色を呈するが底部近くに黒褐色部分がある。2(図版6)は、埋甕に使用されたもので、垂下する3条の沈線が8箇所あり、8区画されている。その中に1条の波状文を施し、その間を縄文で埋めている。底径10.4cm、現在高23cmであり、口縁部を欠いて使用している。口縁部は溝巻文等で飾る横帯をもつものであろう。茶褐色を呈するが、くびれ上部は、黒褐色をなしている。胎土に微細な小石を含み、焼成のよいものである。3(図版6)は、口径14cm、底径7cm、高さ17cmであるがややいびつである。口唇部に刻み目を持ち底部近くまで細い条線が施されている。器外面は茶褐色、内面は灰黒色を呈して、焼成、胎土ともによい。

第8、9図の1~21は、垂下する凹線で区画される中に縄文をもつものが大部分であり、1~5は口縁部に溝巻文等の文様を横帯にもつものである。22~26は綫杉状文をもつものであり、22には肥厚した口縁部下に横並びの「マガタマ」状の文様が施されている。35~36は把手部片、38~41は底部片である。40は透かし穴のある高台片である。これらはいずれも深鉢形の器形をとるものであり、縄文中期末の曾利III~IV式期に比定される土器である。

28~34は区画文を特徴とする藤内式の土器片で、先記土器よりは先行するものである。本址の土器ではなく覆土に混入したものである。

石器には、石鎚、石槍、石錐、凹石がある。石鎚は第20図1~4で、1のみ完形品であるが他の3点は欠損している。いずれも黒曜石製である。5はチャート製の石槍であり、6は雖先部が欠けたチャート製の石錐である。凹石は第25図1、2で、片面に凹みをもつもので、1は安山岩製、2は砂岩製であり欠損している。敲打器としても使用したらしく打痕がみられる。

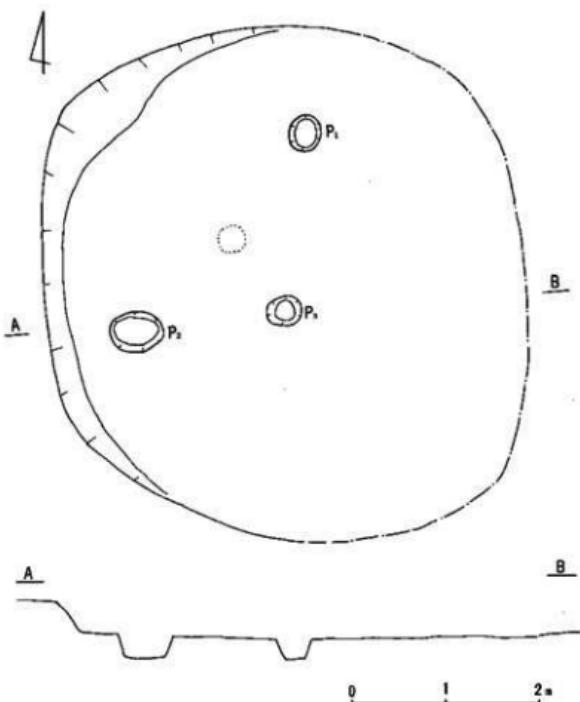
(小松牧俊)

2. 第2号住居址

(1) 遺構(第10図)

本址は調査区のほぼ中央部に位置し、AT-13とCT-13を結んだトレンチに発見されたものである。地形的には東への緩傾斜する中で、わずかの段差をつける箇所に住居址西側がかかって構築されたため、西壁は明確に検出できたが、東側は耕作による擾乱もあって判然としない。本址検出までに、表土中及び覆土中に多量の土器片が出土したり、覆土中に焼石を含む石組らしきものがあつたりしたので、やや堅い平坦面を本址生活面としてとらえた。そして床面精査後、たち割ったところ、更に床面の検出があったので、第3号住居址とした。従って、本址は、第3号住居址上に同心円的に拡張を行い貼床をして構築されたことになる。

本址の規模は、南北で5.4mを測るので、それを径とする円形の竪穴であったと思われる。壁高は西壁で最大34cmを測るが、北側と南側は一部を残すのみで高さを減じていく。床面上の施設としては焼土と柱穴が確認されただけである。ピットは、P₁が、径32×40cmで深さ25cm、P₂が、径60×40cmで深さ26cm、P₃が34×30cmで深さ22cmの3個であり、P₃は主柱穴ではない可能



第10図 東小倉遺跡第2号住居址実測図（1：60）

性がある。P₁とP₂の中間に径30cmの焼土があることから、ここが炉址と考えられる。

(2) 出土遺物

出土遺物には、土器と石器がある。

土器（第12図、第13図1～6）

第12図1～3は底部片である。1は推定底径8.4cmで底面に圧痕がみられる。また内面には炭化物が附着している。2は底径10cmで底部にまで粗い縄文が施されている。3は底部がやや張り出るもので底径9.6cmを測り、細かい縄文が垂下する沈線で区画されている。このような縄文と沈線を施したものに10、13、16等がある。6、7は波状口縁部であるが、この部分にも縄文と沈線がみられるものと思う。4、5、8、9、11、14は沈線や綾杉状文がみられるものであり、8、9、14は「匚」状沈線で区画されている。これら綾杉状文や沈線は粗雑につけられた感じのするものである。また5、14には横並びに「マガタマ」状の施文がみられるし、4には隆帯に刻み目がみられる。施文以外では、焼成のよいもの（6、9、10、11、12、14、17）、炭

化物が内外両面についているもの（6）、口縁部が山形（波状）をなすもの（6、7、10、12）、口唇部が肥大したもの（5、9、15）、装飾把手をもつもの（18、19、第13図1、2）等が注目される。いずれも深鉢形の器形をとるものである。17は口縁上部に横走する沈線があり、その上に帯状に繩文がつけられている。浅鉢形の器形をとるものではないだろうか。

第13図3～6は、釣手土器の釣手（橋状部）である。3、6は橋状部の頂部、4、5はその基部と思われ、施文は沈線と刺突文であって他の土器とは明らかに相違がある。6は作りが他と比して複雑であり、側面から見ると何となく人面のようにも見とれる。出土は比較的浅い南西部の覆土中であった。いずれも釣手のみで下部は不明である。

以上、本址出土の土器として記述したが、後述の第3号住居址に関わる土器があるかもしれない。本址は第3号住居址より新しい時期でなければいけないが、土器は繩文中期末の曾利III～IV式期であり、差はみられない。

石器には、横刃形石器（第20図、7）、打製石斧（第21図、1～9）、凹石（第25図、3、4）、磨石（第25図、10）がある。

横刃形石器はチャート製であり、6cmほどの刃部をもつものである。打製石斧は、1、4、8が変質粘板岩製であるが、他は粘板岩製である。短冊形が多い。凹石3、4共に両面に凹みがあり、4には敲打したと思われる打痕が側面にみられる。10の磨石と4は砂岩製であり、3は安山岩製である。

（降旗俊行）

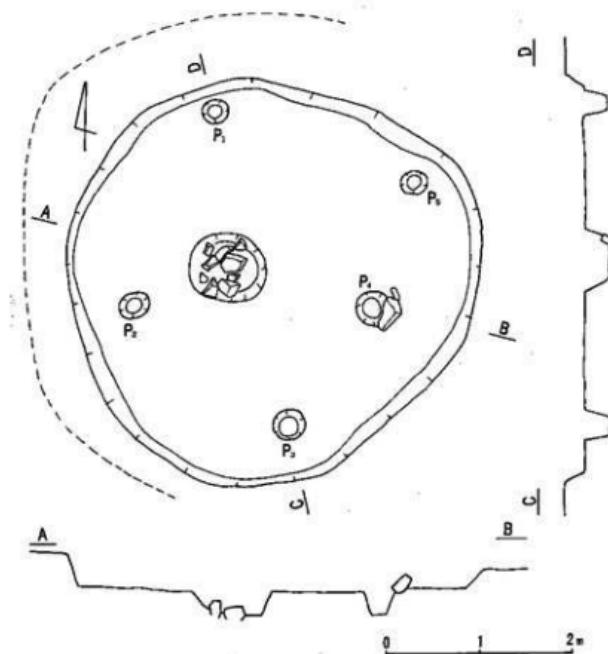
3. 第3号住居址

(1) 遺構 (第11図)

本址は、先記した第2号住居址の直下に検出されたもので、規模は南北4.3m、東西4.4mを測る円形の竪穴である。周壁は全周残っており、西壁35cm、南壁23cm、東壁22cm、北壁22cmの高さを測る。床面の施設としては柱穴と炉址が検出された。

柱穴と思われるビットは、P₁が径26×24cmで深さ26cm、P₂が径34×26cmで深さ30cm、P₃が径34×32cmで深さ26cm、P₄が径34×38cmで深さ26cm、P₅が径28×26cmで深さ26cmである。P₄の東には長さ36cm、巾20cmの石が縁に接して置かれてある。

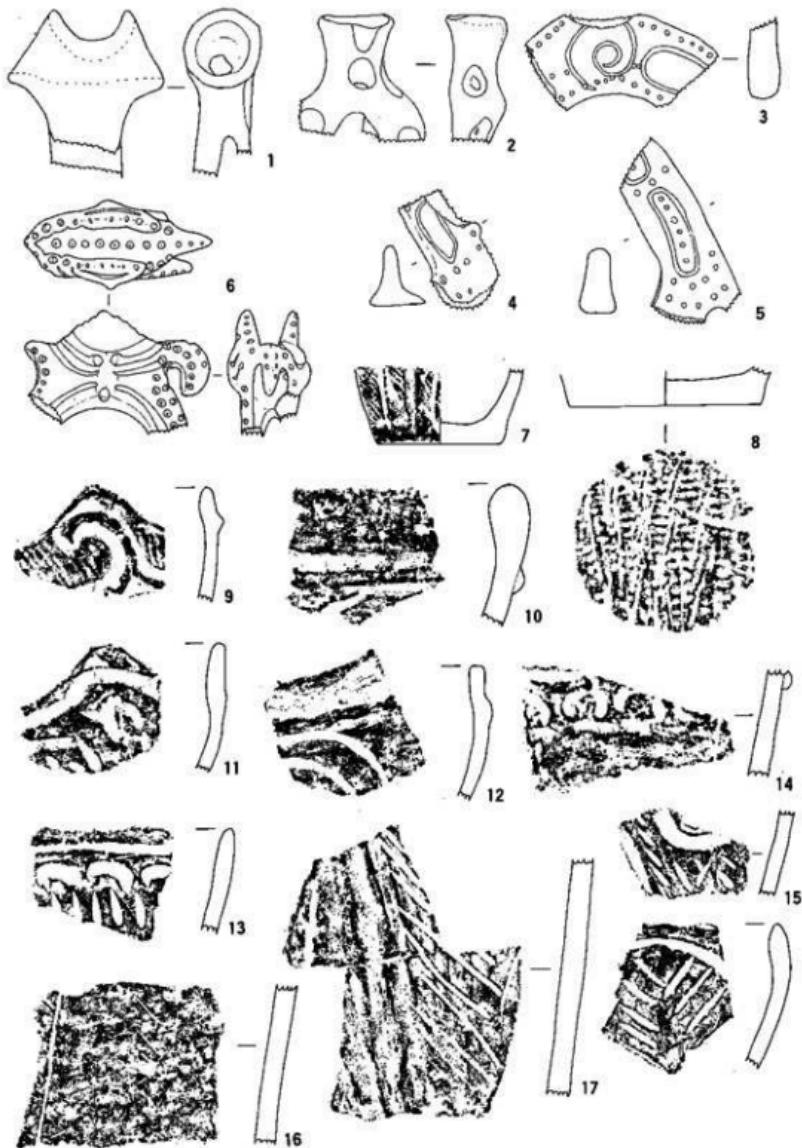
炉址は中央やや西寄りにあり、径86×74cmで深さ27cmの梢円形を呈し、中に焼土がみられた。炉の中には30cmぐらいを最大とする大小の焼石が入っていた。炉縁石として使われたものであろうか。炉の周辺は、2.6×1.5mの範囲にローム土の貼床がみられた。精査したが周溝等はなかった。



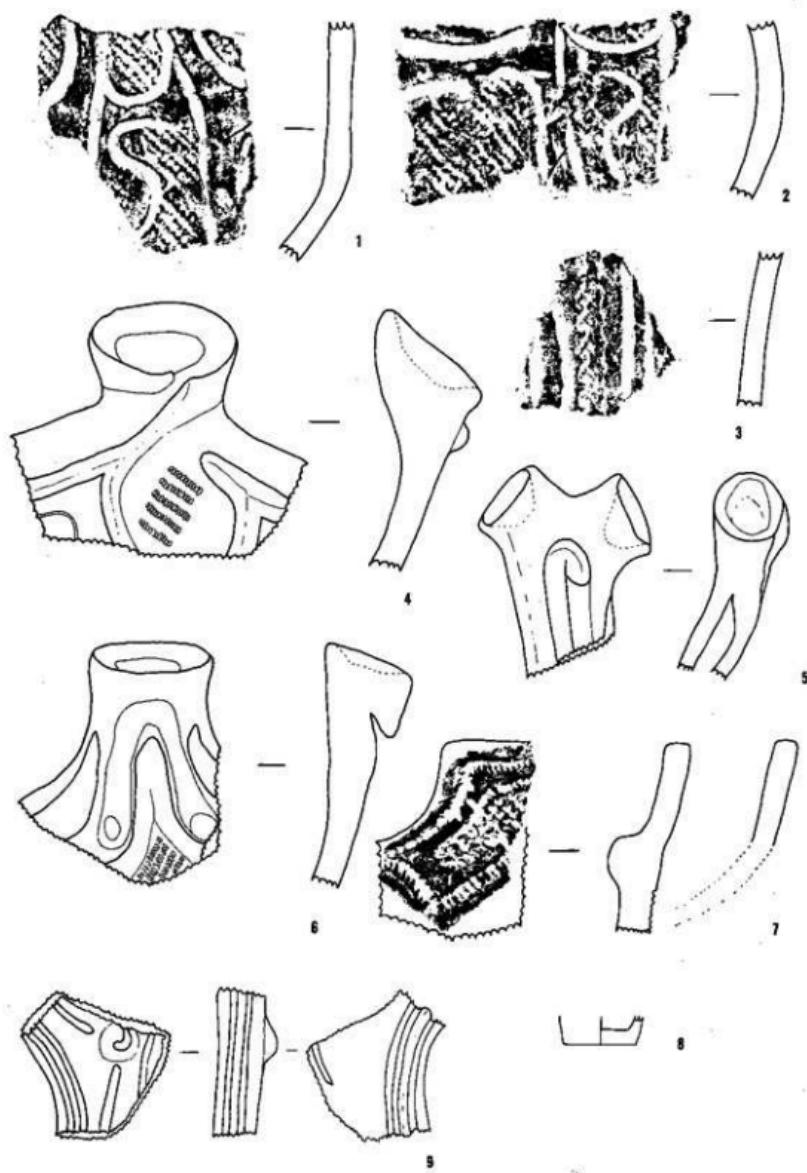
第11図 東小倉遺跡第3号住居址実測図 (1:60)



第12图 東小倉遺跡第2号住居址出土土器拓影 (1:3)



第13図 東小倉遺跡第2・3号居住址出土土器拓影 (1:3) (1~6:2号住, 7~17:3号住)



第14図 東小倉遺跡第3号住居址出土土器拓影（1：2）

(2) 出土遺物

本址出土遺物には、土器、石器、土製品がある。

土器（第13図7～18、第14図1～7）は、7、8が底部片で、底径が7cmと10cmである。7には垂下する沈線間に細かい縄文が、8には底面にアンペラ状圧痕がみられる。焼成のよいもの（第14図1、6）、炭化物の附着したもの（11、12、15）、口縁部が山形（波状）になっているもの（9、11）、装飾把手をもつもの（第14図4～7）、口唇部が肥大したものの（10）などが注意される。

施文等では、沈線間に縄文をみるもの、綾杉状文を施すもの、隆帯をもつもの等で第2号住居址出土土器とその内容は似てはいる。しかし「マガタマ」状施文（13、14）も少し違うように見えるし、綾杉状文も丁寧さがみられるように全体的に相違がある。口縁部に筒状の把手を造った第14図7には、半載竹管状の施文具の連続及び单発施文（刺突）がみられる。いずれも深鉢形の器形をとるものである。

本址出土土器も中期末の曾利III～IV式期に比定されるものである。

土製品としては、小形土器（第14図8）と土偶（同図9）がある。8は底径2.5cm、胸部の器厚4mmのもので施文ははっきりしない。焼成不良である。9は土偶胸部である。厚さ1.5cmで沈線が施され、残存部分の中ほどに粘土をつけて瘤状にした乳房がある。

石器には、打製石斧（第21図10、11）、横刃形石器（同図12）、磨石（第25図11）がある。

打製石斧10は短冊形のもので粘板岩製であり、11は擦形の半欠品であろう。変質粘板岩製である。横刃形石器は泥質チャート製である。磨石は砂岩製であり、一端に敲打したと思われる打痕がみられる。

（降旗俊行）

4. 第4号住居址

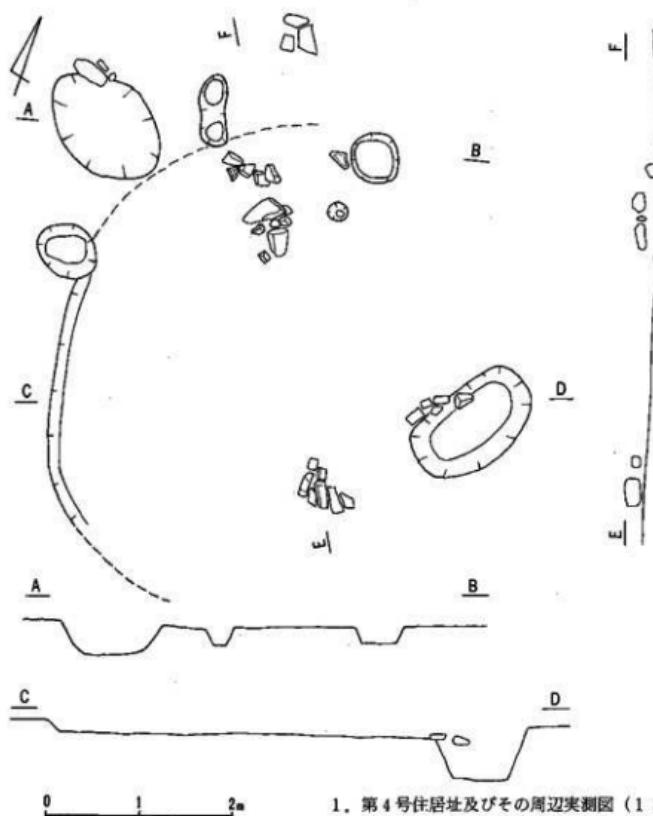
(1) 遺構（第15図）

本址は遺跡の西端に設定されたCトレンチの南端に発見された。地形は西より東に向かって緩傾斜しているが、傾斜変換線はトレンチのやや東を走っているので地表面は未だ平坦、堅穴住居構築には好適な地点に当たっている。

発掘の当初より土器片の出土が多く、住居址の存在が予想されていたが、黒土層中にローム塊の混入が見られたりして、この地点が果樹移植等により擾乱を受けている懸念があった。

調査の結果、住居址の存在は把めたが、壁や床面に鍛錫が及んでいて、西壁の一部が検出されたことにとどまった。床面も十分には検出できず、ビットは数個にとどまっていて、柱穴に擬するに必要な規則性は認められていない。

プランと規模について、残存西壁に対する長辺円形ビットの西壁、東壁間に15cmの違いがあることから、同ビットを壁に接して穿たれたと考えれば、径5mの円形プランを想定することができる。西壁の壁高は15cmだが本来の高さではない。堅穴内に位置するビットの数値を掲げて



1. 第4号住居址及びその周辺実測図 (1 : 60)

第15図 東小倉遺跡第4号住居址及びその周辺造構実測図

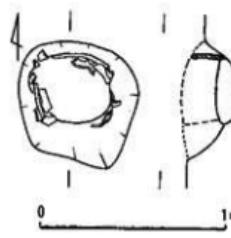
おく。北辺にある円形ピットは径50、深さ18cm。

東南の楕円形ピットは長径140、短径75、深さは45cm。

石塊の集積は二箇所に浮いた状態で見られた。

石塊はいずれも角ばっていて大きくない。

床面上に炉址の痕跡は見られず、盤石の残存ないので、炉は小石塊を炉縁石とする地床炉ではなかったかと推察する。



2. 埋甌実測図 (1 : 30)

次に、4号住居址の周辺遺構について触れる。4号住の残存西壁の北端にピットがあって、同内には平石を据えた上に逆位の埋甕が二点存在していた。ピットは径63cmの円形で、深さは55cm。破壊されて発見された埋甕の推定器高は36から37cmなので、埋甕をもつ住居址の床面は4号住床面より25cm上位にあった。しかし、その住居址は埋甕以外に何の施設をも認められていないので（埋甕の北に存する梢円形ピットは後出のもの）、住居址番号はつけていない。

埋甕を納めたピットは通常は埋甕ぎりぎりに穿たれているが、本址は南縁が大きく掘り崩されてしまっている。二点の埋甕は共に破壊されていて判明しているのは平石に接した下方に口縁部破片が検出されたことだけである。ピットの底径は80cmなので、二個並列の状態を考えるのが妥当だろう。

埋甕の一点は頸部に二条の隆帯をめぐらし以下は縄文のみを押捺した（第6図4）もの、もう一点は口縁外側に格子目状に素麵貼付を施したキャリバー形深鉢（第6図6）である。素麵貼りの埋甕は中期後葉の曾利I式併行のもの、前者の縄文地文の深鉢は松本市の塩辛22号住にあって素麵貼りのキャリバー形深鉢と共存している。

この埋甕には大きな特徴が一つある。石蓋埋甕には多数例があるが、本例はピット底に偏平な河原石（厚さ22、径70～80cm）を据えた上に逆位埋甕を置いている。ピット内から遺物の出土なし。ただ、ピット下方の土壌は黒色土だった。

（2）出土遺物

曾利I式期の竪穴住居を毀して構築された4号住の出土遺物には土器、土製品、石器がある。遺構に密着したものはなく、すべて遊離してしまっている。

土器（第16図1～第19図69）、深鉢形土器が大部分だが、有孔鈎付土器（56）、吊手土器（57）が各一点ある。吊手土器は吊手の部分で、形式的には後出する。深鉢形土器のうち、1は口縁が波状を呈するもので、口縁部には縱走する条線を地文に置いて渦文を描いている。6は櫛形文の施された下脣部破片、2、5、7は頸部の横帯文様、7の頸部上には条線が見える。

縄文を施した26点（3、9、11～31、58、59、69）の口縁形には波状を呈するものと平縁のものとがあり後者の方が多い。波状口縁の突起部には葺状をなし複雑な穿孔を施したもの（58）がある。縄文は太い凹線で描かれた奔放な波状曲線の内部を填めているもの（11、19～23、53）が多い。平縁の深鉢は無文の口縁下に縄文が押捺されたもの（15、17、18）で、18は縄文地文の上に曲線を描いている。32、33、35～55、61、62、68は沈線のみで描かれていて、太い施文具で刻されている。縦線で区切られた面を斜状文、綾杉文で填めている。勾玉状の文様を一列に並べたケース（35～37）も見られる。

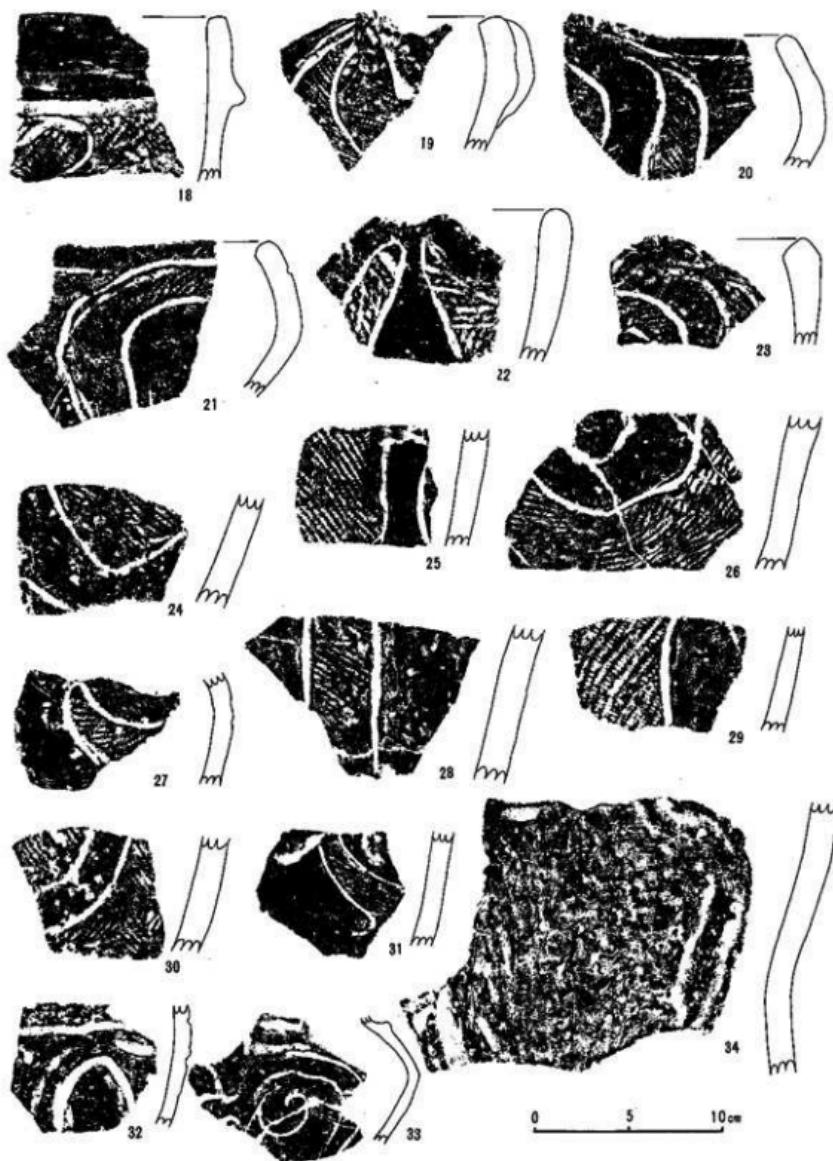
底部は平底、一点だけ脚を存するもの（66）がある。網代痕のあるものが二点（61、62）ある。

以上の様相から、土器の多くは曾利IV、V式期に併行する。

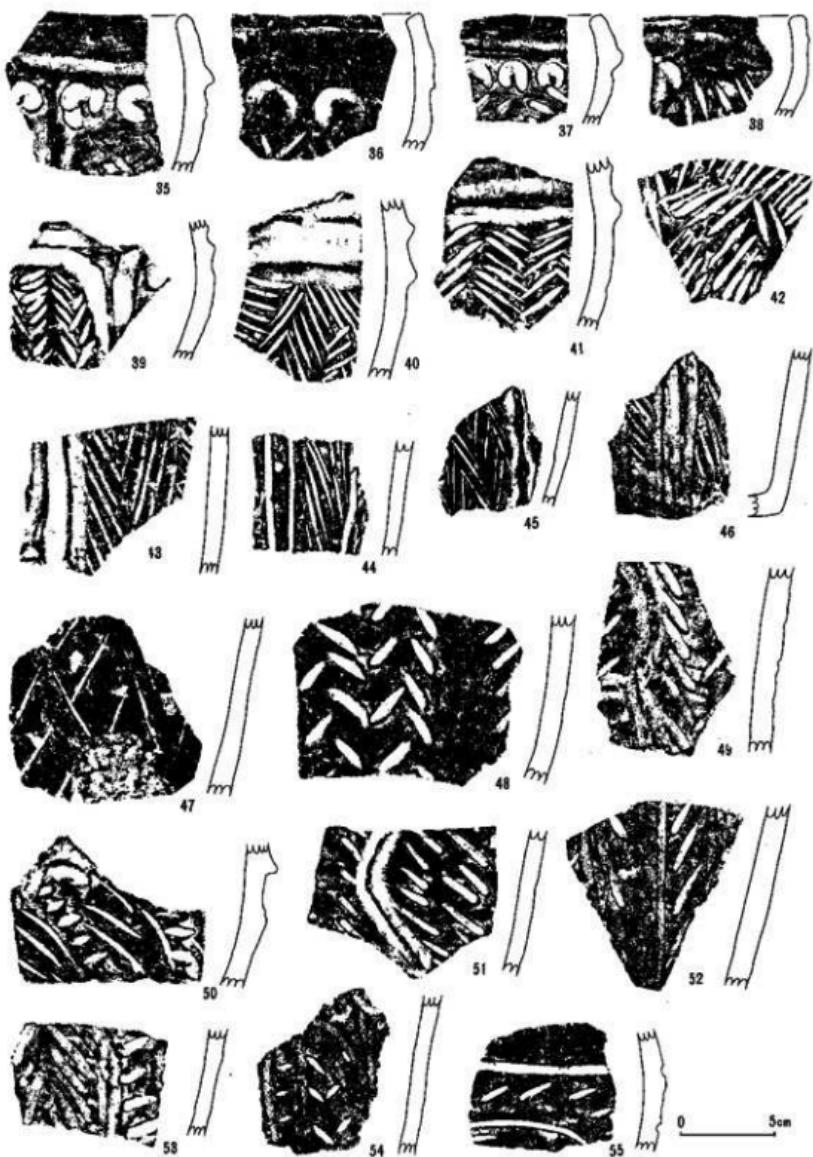
土製品、土偶の足部が四点（第44図3、4、6、7）ある。3、4、6には「ハ」ノ字文様



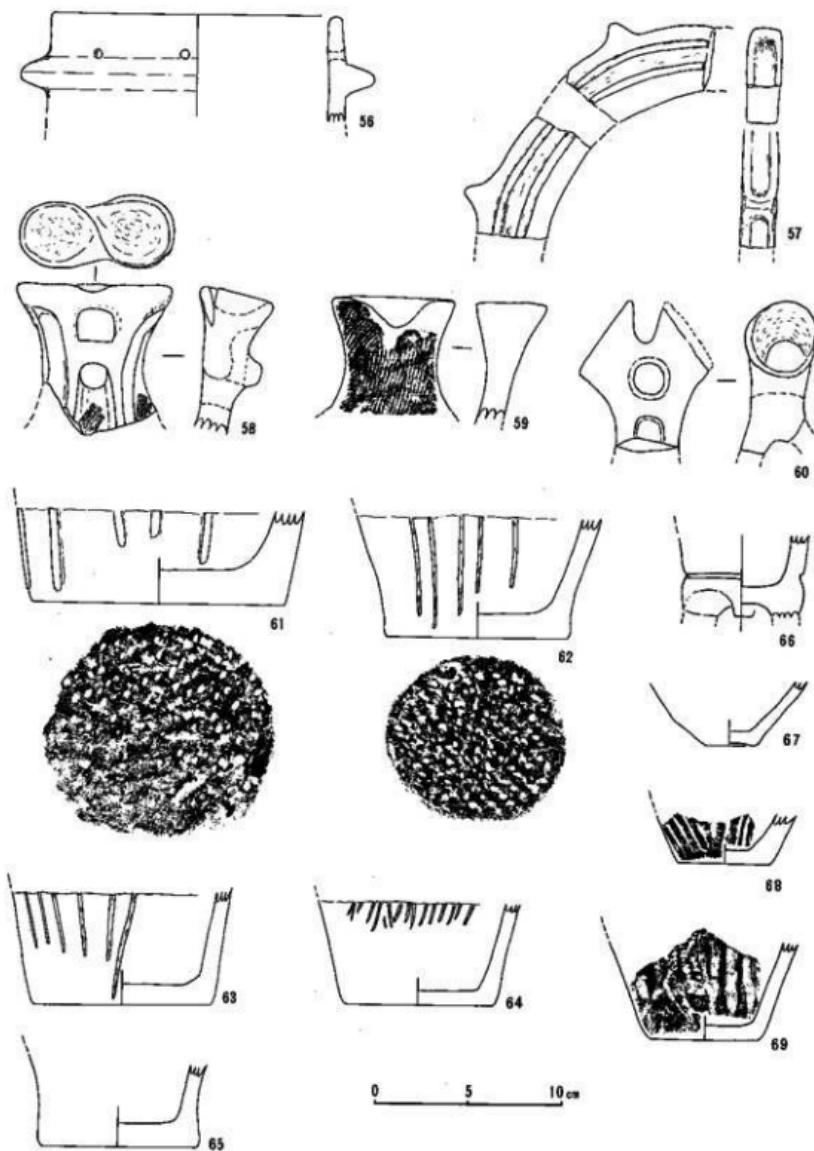
第16図 東小倉遺跡第4号住居址出土土器拓影その1 (1:3)



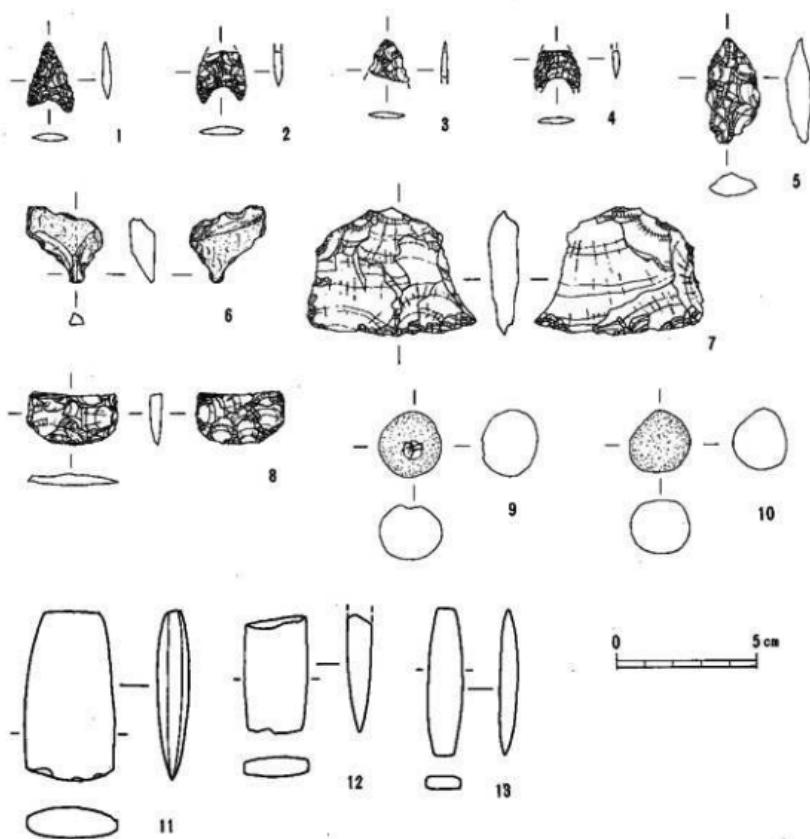
第17図 東小倉遺跡第4号住居址出土土器拓影その2 (1 : 3)



第18図 東小倉遺跡第4号住居址出土土器拓影その3 (1:3)



第19図 東小倉遺跡第4号住居址出土土器拓影その4 (1:3)

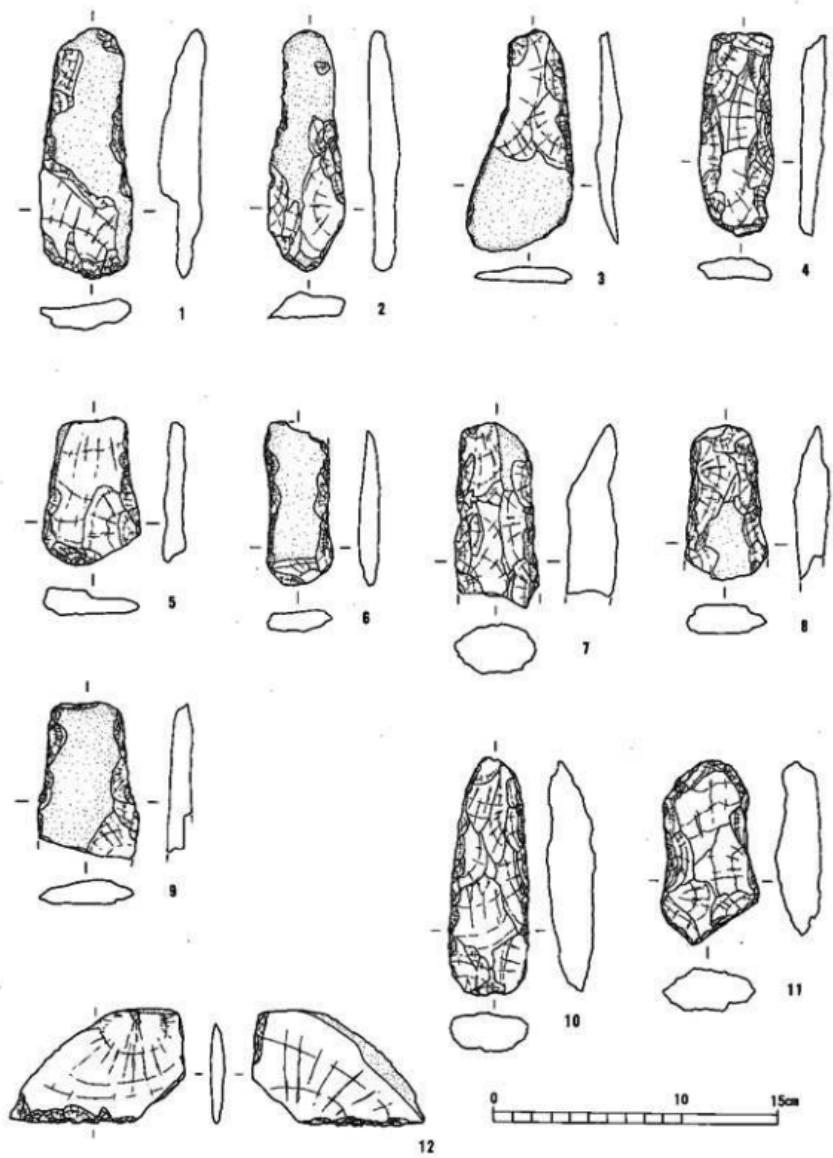


第20図 東小倉遺跡出土石器（1：2）

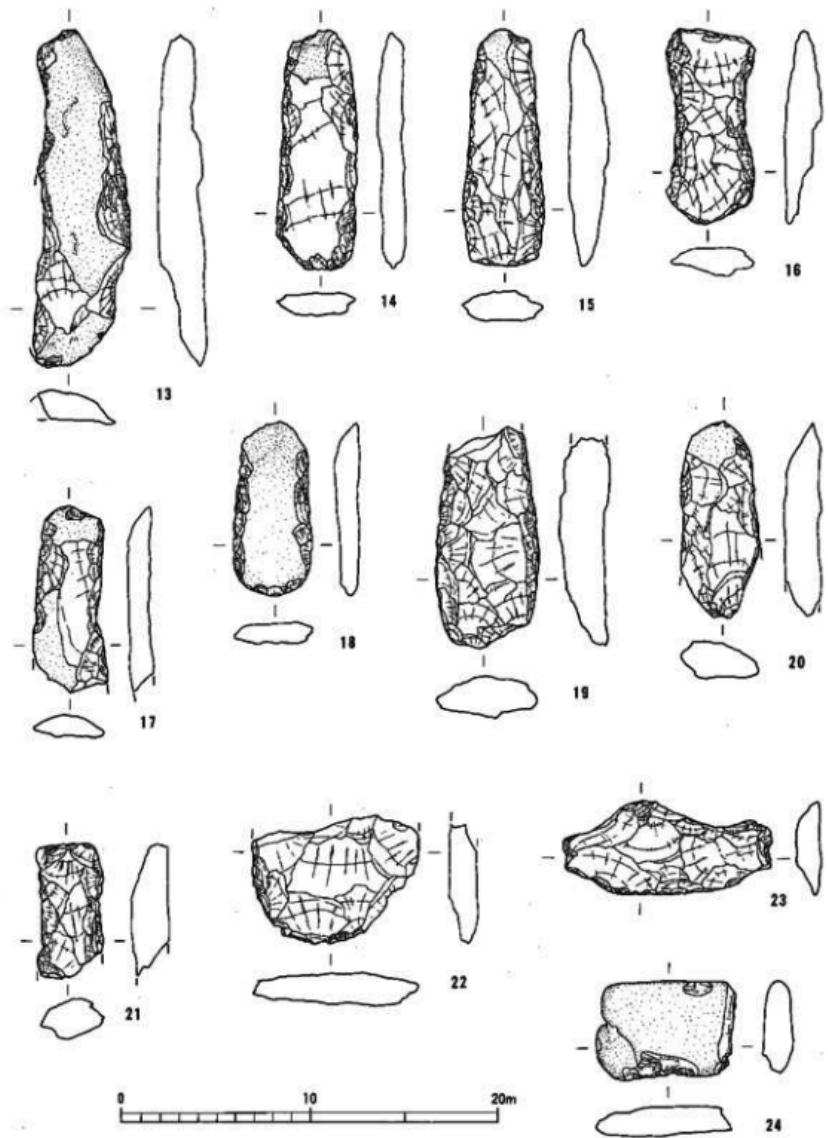
(1～6：1住, 7：2住, 8：Bトレンチ20,
9～11：土坑1, 13：4住, 12：表探)

が描かれていて中期末に置かれる。3、4、6の足部中央には小孔が穿たれている。

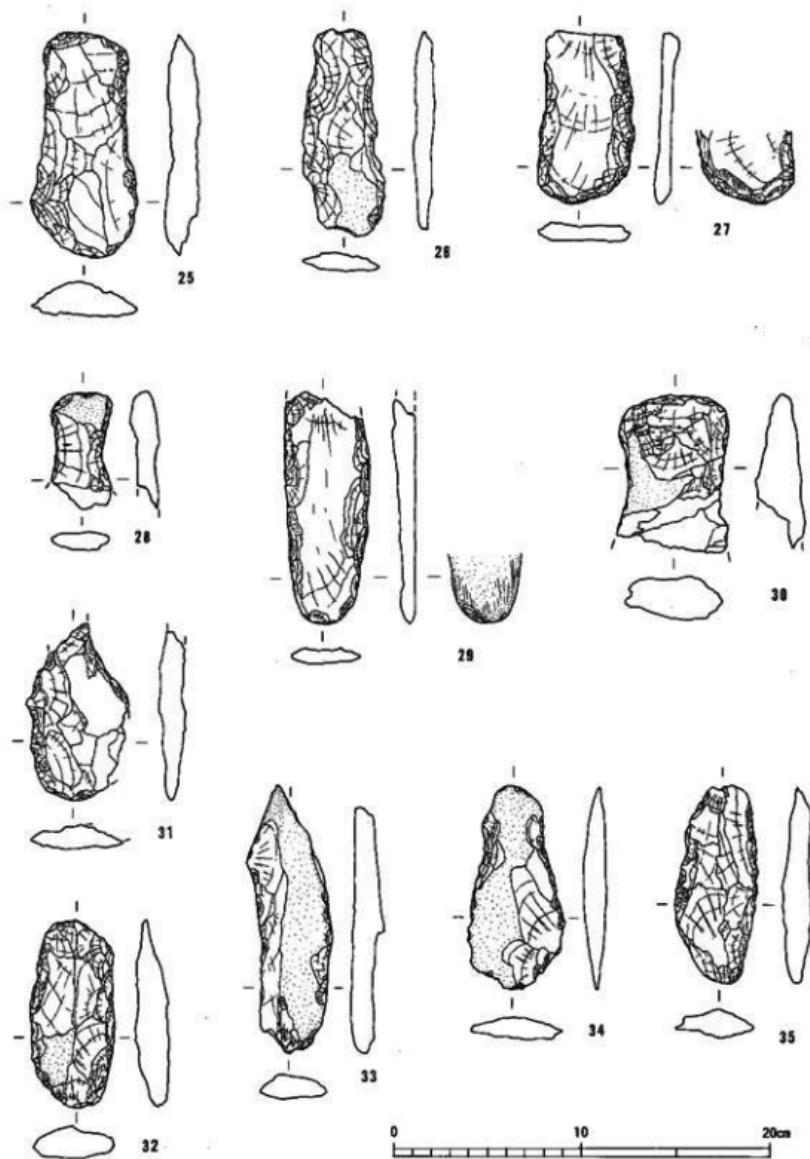
石器、打製石斧が多い（第22図13～22）。短冊形で長さは8cm未満、幅は3cm前後の小形品で、石質には粘板岩が多い。第22図23は横刃形石器、同図24は砂質粘板岩の礫器。第20図13は長さ5.1、幅1.2、厚さ0.4cmのすこぶる小形の両刃磨製石斧である。（桐原 健）



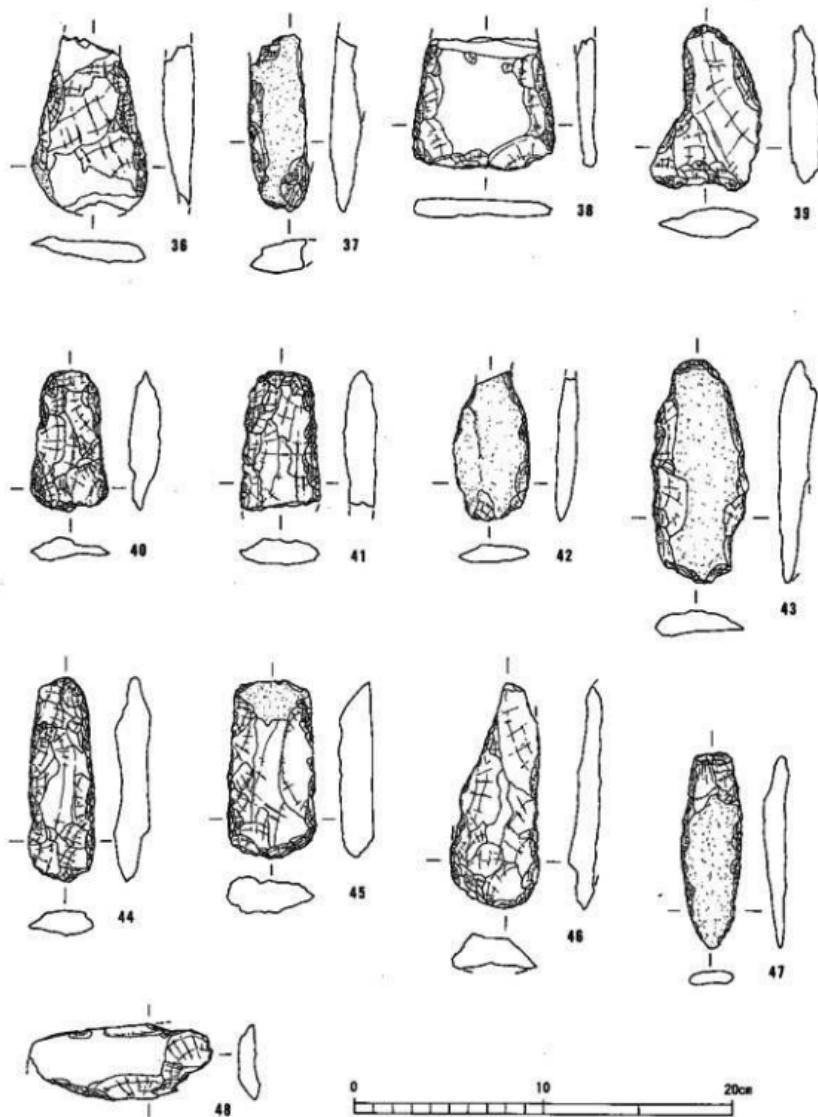
第21図 東小倉遺跡出土石器 (1 : 3) (1~9 : 2住, 10~12 : 3住)



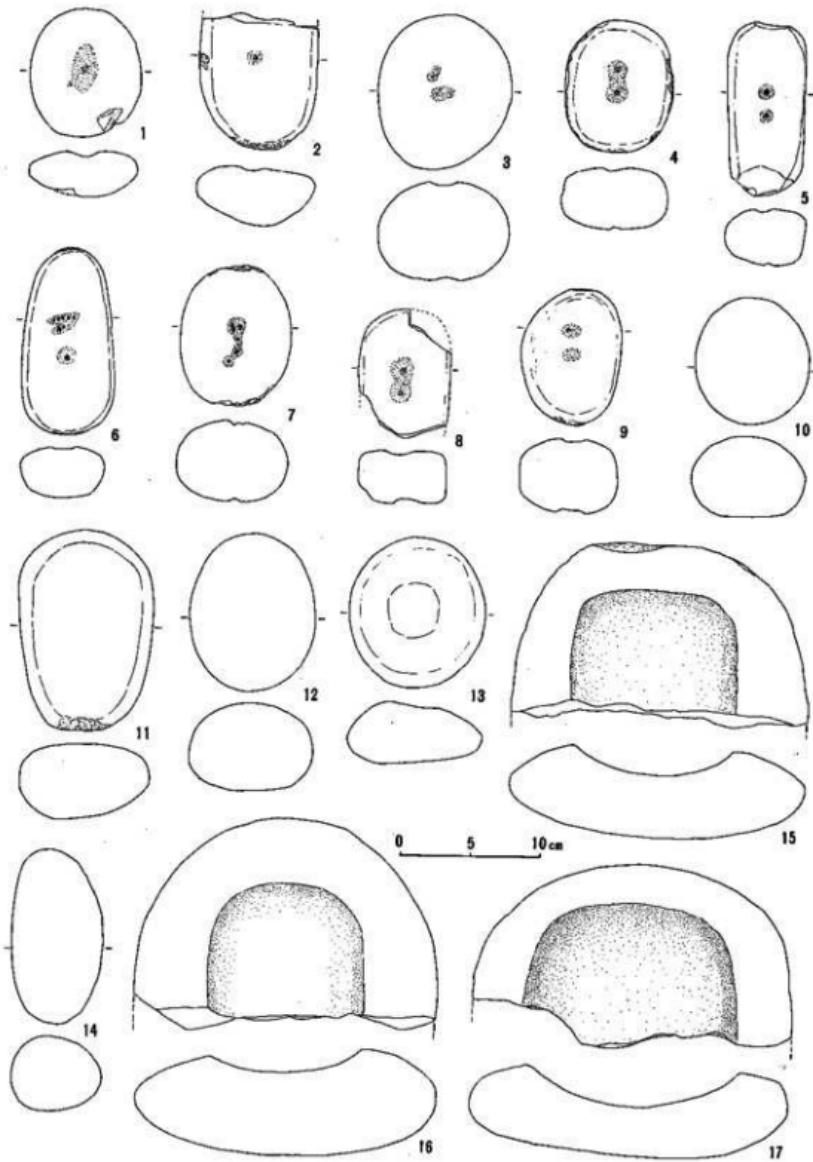
第22図 東小倉遺跡出土石器 (1 : 3) (13~24 : 4 住)



第23図 東小倉遺跡出土石器 (1 : 3) (25~28 : 小堅穴 1, 29~31 : 土坑 1,
32~35 : A トレンチ出土)



第24図 東小倉遺跡出土石器 (1 : 3) (36~39 : Aトレンチ, 40~43 : Bトレンチ,
44~48 : Cトレンチ)



第25図 東小倉遺跡出土石器（凹石、磨石、石皿）（1：4）

（1・2：1住，3・4・10：2住，5：土坑1，6・8・9・13：Cトレンチ，
7・14：Bトレンチ，11：3住，12：Aトレンチ，15：土坑2，16・17：樋内氏採集）

5. 小堅穴 1

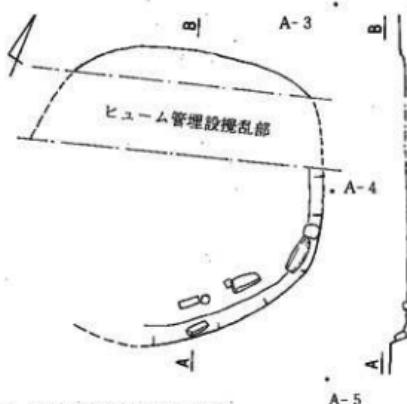
(1) 造構 (第26図、1)

小堅穴 1 は、調査区では北東部に当たる A トレンチ 3 区から 4 区に確認されたものである。3 区掘り下げ中に多量の土器片とヒスイの未製品珠や打製石斧の出土を見たため、3 区を西に拡張したり、4 区の掘り下げを行なって遺構の検出に当たった。しかし北半分は東西にヒューム管が埋設されたため擾乱されていて床面や柱穴の検出は不可能であった。

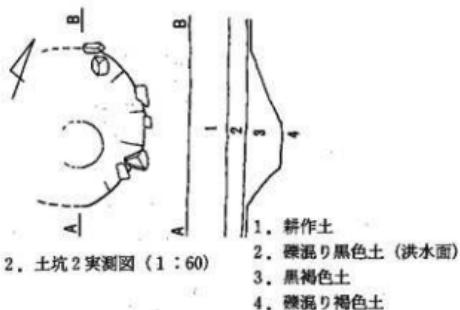
規模は南北で 3.2m を測る円形プランの堅穴であり、南側周壁は 15cm、北側で 5cm の高さをみた。床面は疊混り褐色土で平坦面を作っているが、余り堅さは感じられない。床面上に炉址、柱穴の検出はなかったが、南東部の周壁に沿って、20~40cm の石を縁どりするかのように並べたものが数個みられた。出土遺物では土器片が多く、住居址とみられる可能性も存したが、やや小さ目のこと、北半分が擾乱されて不明になっていることから炉址の検出は不可と考え、小堅穴とした。

(2) 出土遺物

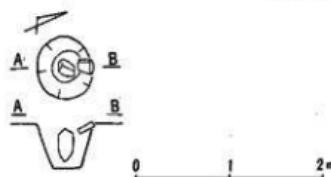
土器、石器、土製品、石製



1. 小堅穴 1 実測図 (1 : 60)

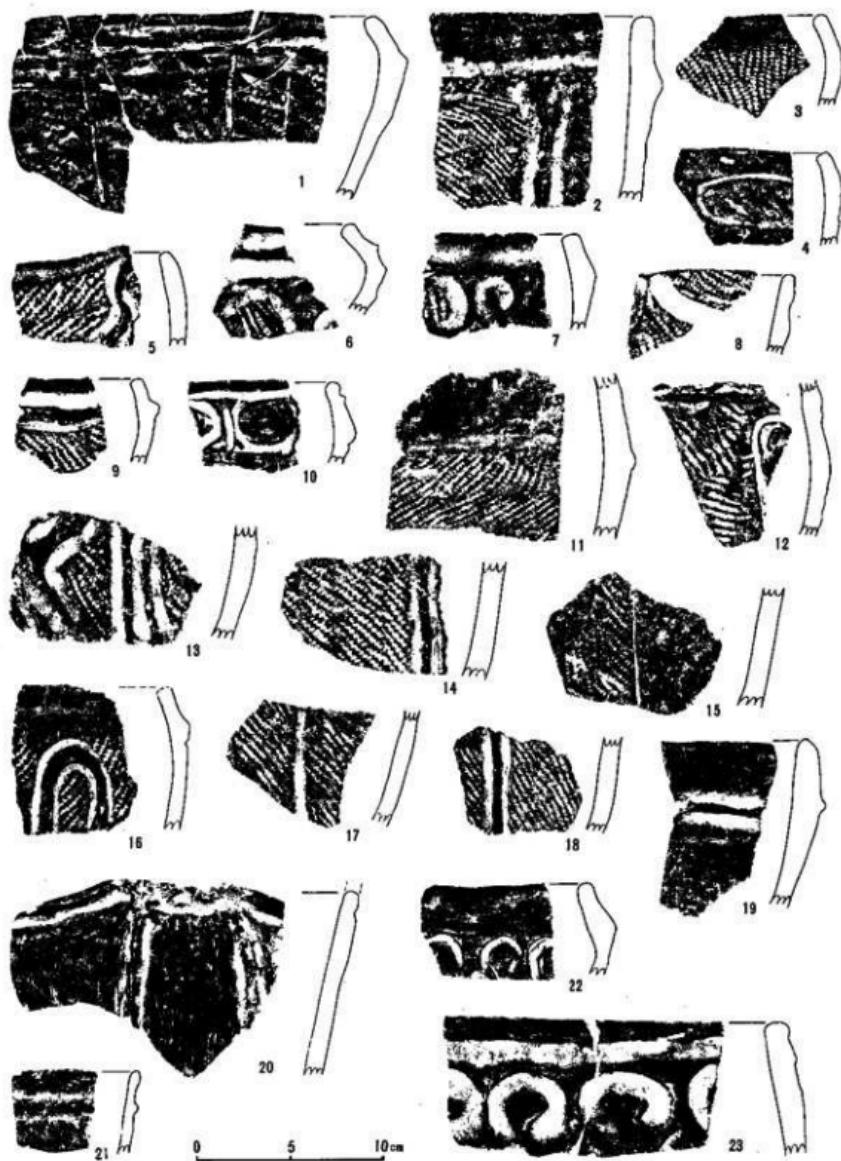


2. 土坑 2 実測図 (1 : 60)



3. 土器片の入ったピット (1 : 60)

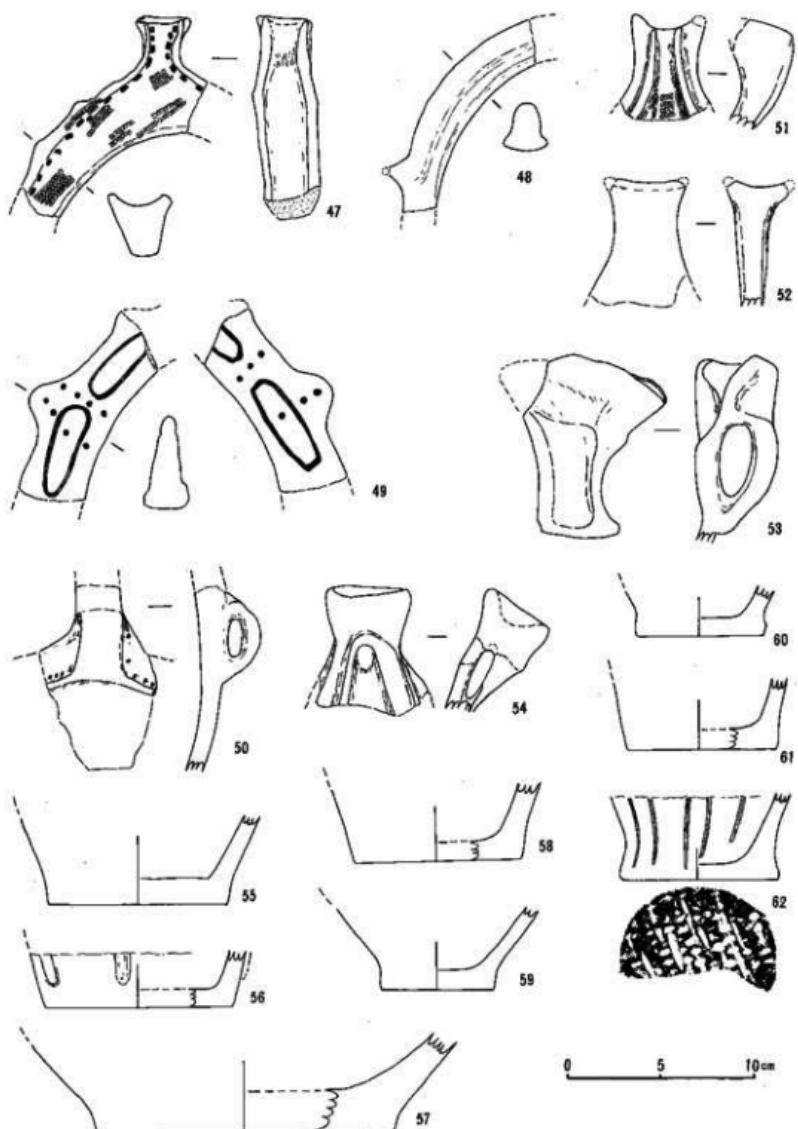
第26図 東小倉遺跡小堅穴 1、土坑 2、土器片の入ったピット実測図



第27図 東小倉遺跡小豈穴1出土土器拓影その1 (1:3)



第28図 東小倉遺跡小野穴1出土土器拓影その2 (1 : 3)



第29図 東小倉遺跡小野穴1出土土器拓影その3 (1 : 3)

品の出土がある。

土器（第6図、7、第27、28、29図1～62）は全部破片で器形の判るものはない。1～18は、縄文を有するもので、垂下する凹線で区画されるものが多い。縄文も口縁部近くから施される1、2、3、5、16等と口縁部に沿って横帶がありその下に施される6～10等がある。口縁部は内弯する1、3、6等と直線的な2などがあり、いずれも深鉢形の器形をとるものである。

19～21は、口縁部に無文帯を多くもつもので、19、21には横位の隆帯、20には縱方向の隆帯がみられる。22～46は、箒状工具による綾杉状の凹線が施されるもので、やや粗雑な作りである。特長的な「C」の字が口縁部下につけられる22～26がある。いずれも深鉢形の器形をとるものである。

第6図7と第29図47～50は釣手土器の釣手部で、その個体数の多さに驚く。7は推定口径18cmほどで、口縁はゆるやかな波状を呈するらしい。口縁下に横走する細い隆帯があり、その下に縄文と隆線がつけられている。釣手部は断面三角形状で胎土焼成ともによい。

47には釣手頂部に撮み状の突起がつき、側面に刺突文と縄文がつけられている。49は釣手上面が波状に作られ、側面に長梢円の沈線と丸い刺突文がある。50は釣手部が口縁部に接続するもので、そこに更に把手が付けられている。把手に沿って刺突文がある。これら釣手土器はいずれも胎土・焼成ともによく堅くしまった感じがする。

51～54は把手部片であり、55～62は底部片である。57は底径約16cmと大きいが、他は7～10cm程度である。62は垂下する凹線をもつもので底面に粗い網代痕がある。

これらの土器片はいずれも中期末の曾利III～IV式期に比定されるものであることから本小豊穴の時期は曾利IV式期ごろにおきたい。

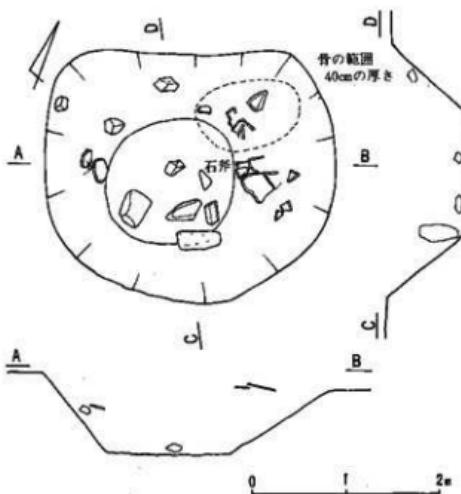
石器では打製石斧（第23図25～28）が4点ある。27は砂岩製であるが他の3本は粘板岩製である。土製品としては、土偶の右手部片（第44図5）がある。覆土出土のためAT-4出土で処理してしまったが、本小豊穴のものである。5cmほどのものであるが上部に二本の長い沈線、下部に短い二本の沈線がつけられている。胎土には微細な小石を含むが焼成もよく灰褐色を呈している。石製品は、ヒスイの未製品（第42図9）である。断面が梢円形を呈するもので長さ6.5cmを測る。小さいが重量感がある。両端部は磨きが不充分で粗雑な感じだが中央辺はよく研磨されて一部にヒスイ特有の青緑色がみられる。これも覆土出土のためAT-3で処理してしまった。

（山田瑞穂）

6. 土坑1

(1) 遺構（第30図）

Bトレンチの北端より12m離れて発見された。緩傾斜面の中辺に設けられた断面台形をなす土坑で、平面形は上面が隅丸方形、底面は円形を呈する。規模は上面径が3.0×2.6m、深さは西縁で0.8、東縁で0.7m。底面径は1.3mを計る。底部にピットなどの施設はない。壁面にお



第30図 東小倉遺跡土坑1 実測図 (1 : 60)

いても同様である。

土坑内には土器片、石器、石塊が投げ込まれた状態で雜然と存在していた。下底部近く地下水の湧出が僅かあり土層の色は漆黒色を呈していた。コナラ、ススキ、カヤの炭化物が含まれていた。また、炭の粉末や火熱を受けた骨片の出土もあった。

(2) 出土遺物

土器、石器、炭化したコナラ、ススキ、カヤと火熱を受けた骨片がある。

土器 すべて破片(第7図8~11、第31図、32図)、殆どが深鉢だが、吊手土器の吊手部破片が二点(30、31)ある。深鉢は大半がキャリバー形だが、7図の8、10は直立した口縁と丸く張った肩部を有している。おそらく下胴部は急にこけ、小さい底部で終るものだろう。丈高い口縁は無文である。口縁には四つ乃至五つに大きく波打つもの(第7図9、31図1、11)があり、中には角柱状突起を有するもの(32図29)がある。文様には纏文と太い施文具で描かれた綾杉文とがある。

石器 粘板岩製の打製石斧三点(23図29~31)と一点の点紋綠泥片岩の石棒(42図2)がある。

石棒は頭部の欠失したもので、現存長21、一端の径は4と3cm。相当な火熱を蒙っている。また25図5の凹石もある。両面に凹みをもち、敲打されたのか一端に欠損がみられる。20図9、

10は砂岩製の径2cmほどの丸い玉である。

本土坑は土器片の示す様相から中期末の構築と判断される。

(桐原 健)

7. 土 坑 2

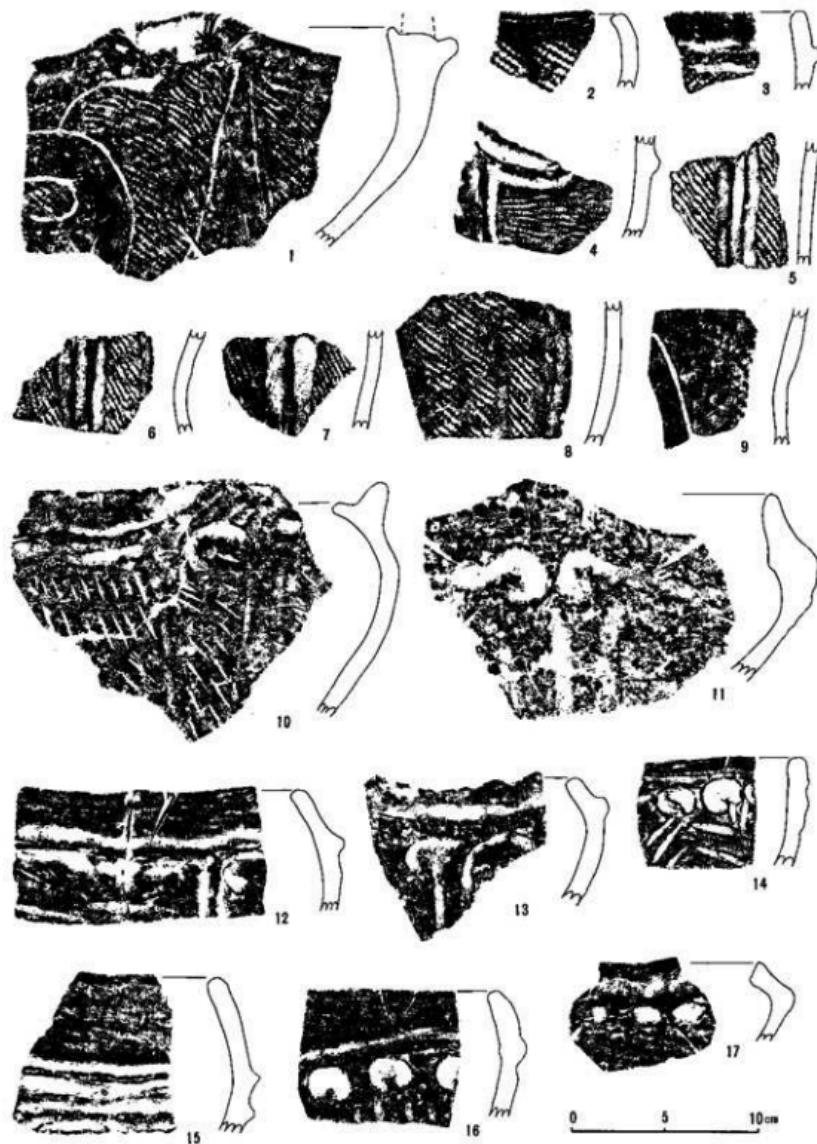
(1) 遺 構 (第26図2)

Aトレンチ2区に確認された土坑で、小豎穴1の北隣りの位置であり、調査区では北東端に当たるところである。土層は耕作土(40cm)、礫混り黒色土(20cm)、黒褐色土(5cm)、礫混り褐色土となり、土坑は礫混り褐色土を掘り込んで作られている。規模は南北で1.65mを測り、深さ35cmのすり鉢状の凹みをもつものである。完掘していないが東側の縁には10~25cmの石が6個置かれてある。

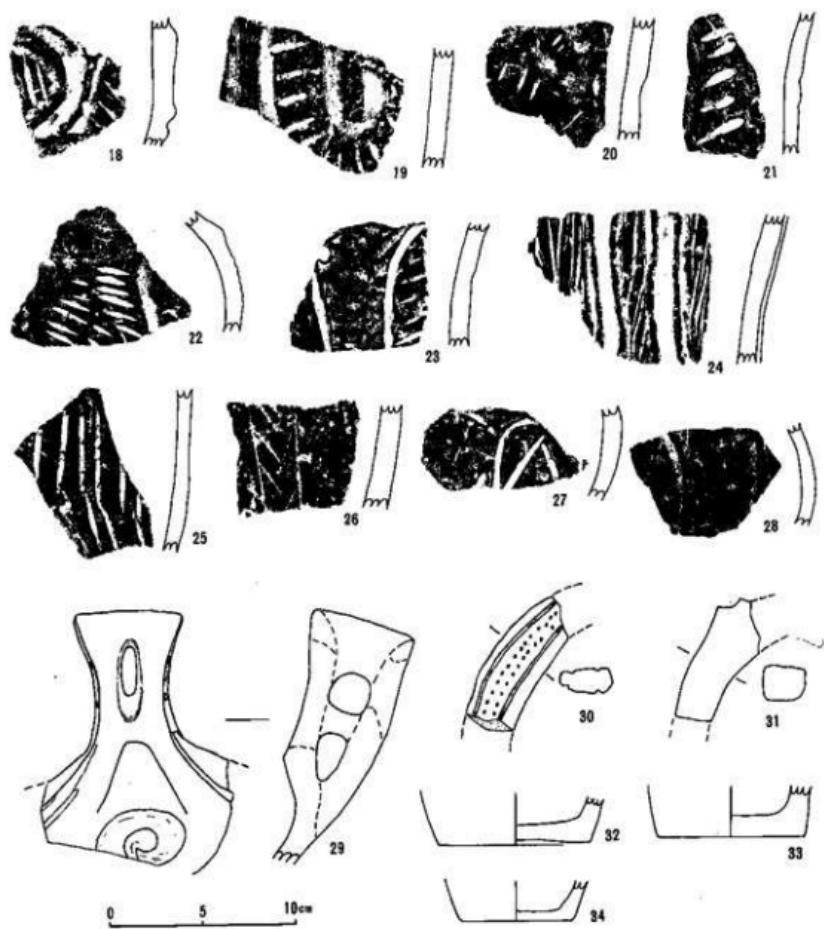
(2) 出土遺物 (第25図15)

安山岩製の半欠の石皿が出土した。Aトレンチ2から、同図12の磨石が出土しており、石皿とセットをなしていたのかもしれない。

(山田瑞穂)



第31図 東小倉遺跡土坑1出土土器拓影その1 (1:3)



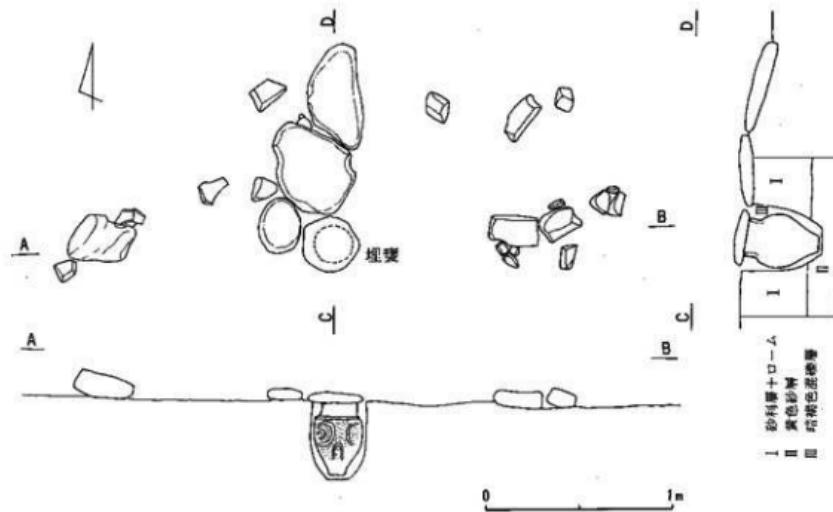
第32図 東小倉遺跡土坑1出土土器拓影その2 (1 : 3)

8. 埋 窒

(1) 遺 構 (第33図)

土地所有者の堀内氏が耕作中に蓋石と埋甕を発見したため、今回の発掘調査の契機となったものである。調査範囲からいうと東側寄りの中ほどで、本埋甕の遺構検出をはかるためAトレーナーを設定したわけである。A13区の西にあるため、住居址を想定して、11~14区まで東西両側を拡張してその検出に当たった。しかし耕作土が、西拡張部で30cm、東拡張部で20~25cmと浅いため歓先による擾乱があって住居址の周壁も柱穴も炉址も確認できなかった。敷石遺構も想定し、敷石遺構では柱穴が敷石の外に多いことも考慮してその検出に努めたが、第33図に示す埋甕の北に続く配石とその西方及び東方に散在する自然石しかみることができなかつた。

埋甕は断面図でみると、ロームの混じった砂利層とその下にある黄色砂層を、土器の寸



第33図 東小倉遺跡埋甕と配石実測図 (1 : 30)

法に合わせたかのように掘り込んで正位の状態で埋められている。そのためすき間にに入った磧混りの暗褐色土はわずかである。埋甕として使われた土器は両耳壺であるが、両把手はとり去って使っている。埋甕には密着して径30cmの平石が蓋石としてのせられている。そして西側に長さ30cmの平石が、すぐ北には接して45cmほどの長さの平石が2個続いて配石されている。またほぼ同じレベルで蓋石の西方90cmに長さ30cmほどの自然石と小石が2個、東方65cmから140cmにかけてとその北40cmほどにかけて13個の小石と角ばった自然石の集まりがそれぞれみ

られる。配列には規則性はみられない。

埋甕に続く配石から、敷石遺構としての疑問も残るが、プラン、柱穴、焼土、床面等の確認がなかったので、埋甕として扱うことにした。

(2) 出土遺物 (第7図12、口絵、図版6)

埋甕周辺からは、わずかに土器片の出土があった。図示したのは第7図12の埋甕に使われた壺形土器だけである。先記したように埋める際に邪魔になるため取ってしまったのかどうかはわからないが、両把手は痕跡だけで付いていない。図示したものは図上復元したものである。器高は現在高40cmであるが、口縁部ではなく接合部であることから推定器高41cmほどのものと思われる。口縁部は胴部からほぼ直上し、口径20cmほどである。胴部は膨らみ最大径30cmであり、そこから底部に細まっていき底径10cmを計る。底部の割に胴部が大きいためか、やや不安定な感じをもつ壺形土器である。胎土に微細な小石を含んで焼成共によく、赤褐色を呈するが一部に黄褐色のところもみられる。図示した反対面には器外面の剥落がある。文様は口縁部ではなく、膨らむ胴部から下に施されている。最上部には隆帯が周囲に、その上に縄文を付けている。その下には、ヘラ状工具で「の」の字状に凹線が相似形風につけられ、またその間に上に円形、下に長円形の凹線が見られる。そしてこの凹線間器面は縄文が施されており、見栄えのある土器である。把手は隆帯から最大胴部にかけて付けられている。中期末葉の曾利V式土器に比定されるものであろう。

埋甕内の土は精査したが遺物は何もなかった。

(青沼博之)

9. 土器片の入ったピット

(1) 遺構 (第26図3)

Cトレチ6区、1号住の南6mに発見された径60、深さ50cmの円形ピットで、内部には黒色土が充満していた。内より二点の石塊と26点の土器片が検出されている。

ピットの上方より土器の底部破片が発見されたので住居址の出入口部に設けられている逆位の埋甕かと思われたが、住居の床面は見当たらない。土器片も一個体には復原されなかつたので標記の題名で記述することになった。

(2) 出土遺物 (第34図)

34図に掲げた26点の土器破片で、太い凹線で画された縦方向の器面を縄文で塗めたもの、同じ施文具で綾杉文を描いたもの等がある。

中期末に位置するものである。

(桐原 健)



第34図 東小倉遺跡Cトレンチ6区土器片の入ったピット出土土器拓影 (1 : 3)

10. 集 石

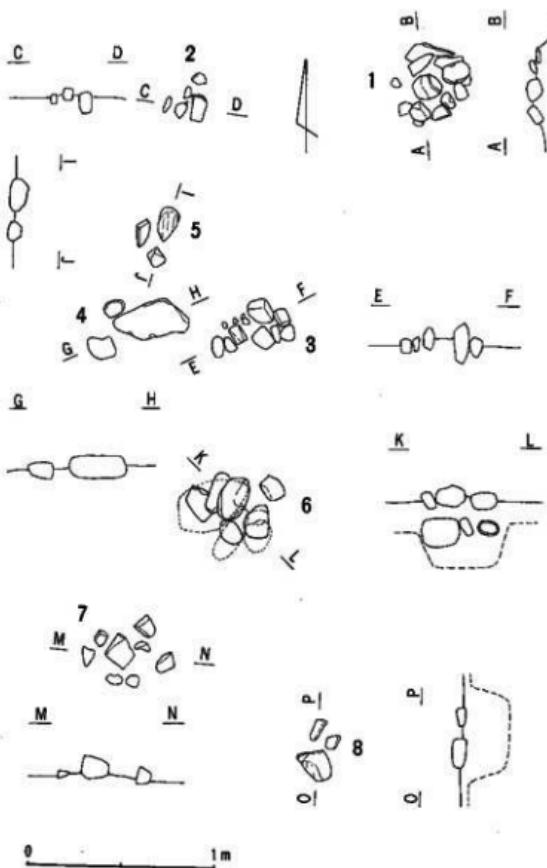
(1) 遺構 (第35図)

第1号住居址検出作業中、西方へ拡張の際3～数個の石組みが8箇所あることを確認した。第1号住居址検出行程のこともあるため、集石についてもやや精査を欠いたことはいなめないが、一応第35図に示した1～8の集石を検出し得た。発掘時の所見からすると、集石1～8は、第1号住居址の西壁に沿った形で住居址内に作られており、そのことからして集石1～8は住居址廃絶後に作られたものであることがわかる。しかし廃絶後長期間を経てのものではないらしい。出土遺物からその性格を考える資料には恵まれず、不明と言わざるを得ないが、中には廃屋墓的なものがあるのかもしれない。以下、個々の集石について記したい。

① 集 石 1

検出した集石では一番北に位置するもので、径約45cmに5～20cmの自然石を配置し、その中に15cm程の標識とも言うべき石を置いたものである。使われた石は、やや小さい感はあるが、その配置が明確に伝わるもので、離山遺跡では組み石と呼んだ類のものであろう。

② 集 石 2



第35図 東小倉遺跡集石1～8実測図 (1 : 30)

集石 1 の西方に検出されたもので、7～14cm 程の自然石 5 個の集まりである。構築当初からの姿なのか、それとも石を他に使った破壊された姿なのか不明であるが、集石 1 から判断すると後者のような感じを受ける。

③ 集 石 3

集石 2 の南に位置したもので、北半分は半円状をなしていることから、径 45cm 程の組み石であり、南半分の幾つかの石が、取り去られたものと考えられる。小石を含めると 12 個の自然石がみられるものである。

④ 集 石 4

集石 3 の西隣りの 3 個の自然石からなるものである。標識となりそうな 42cm 程の石の西側に 2 個の石がみられるが、当初の姿ではないものと思われる。

⑤ 集 石 5

集石 4 の北隣りの 3 個の自然石からなるものである。集石 4 と同様に考えたい。

調査時、集石 3、4、5 はまとまった一つの単位としてとらえた方がよろしいかとの考え方であったが、集石 1、6、8 からして別々に呼称した。調査結果は一つのものとする決め手も得られず、別々のものとして扱いでよかったです。

⑥ 集 石 6

集石 3 の南に検出されたもので、土器を持つことと下にピットを持つことで他の集石とは異なっている。集石は上面に 6 個の自然石による組み石があり、その下に 2 個の自然石と口縁部を北にした土器が、ほぼ同レベルに置かれていた。上面の長さ 25cm 程の石が標識的なものになるのか、それを中心にして 50cm の範囲に石が配されている。上面の石下 5cm 程に更に 2 個の割合大きな石があり、その東側に土器が、径 50cm のピット上面に埋設されていた。土器の北側には焼土が径 30cm 程みられ、ピット内部には木材の小炭化物がみられた。土器は第 7 図 13 (図版 6) の現存高 17.5cm の高台の付くものである。

⑦ 集 石 7

集石 6 の南に検出されたもので、集石 1 と同じ内容を示すものである。7～10cm 程の自然石 7 個を東西 50cm 、南北 40cm の梢円形状に配した中ほどに、14cm 程の標識とも思える自然石を置いていたものである。

⑧ 集 石 8

集石 7 の東に発見されたもので、検出された集石の中では、集石 7 と共に一番南に位置している。15cm の標識となる石の他に、北側に 2 個の石を有するもので、下部に径 50cm 、深さ 20cm のピットをもっている。ピット内底面近くに木材の小炭化物が混入していた。

(2) 出土遺物 (第 36、37 図)

集石 2～8 からの出土遺物は土器だけである。第 1 号住居址のところでも記してあるが第 1 号住居址の西側には先行すると思われる住居址の存在が確認されていることから、集石出土土

器は、大部分がそれら 2 軒の住居址のものとも考えられる。しかし、石組みの中からの出土であるため集石出土としてまとめてみた。器形の判明するものは集石 6 の高台の付く深鉢形土器のみで、他はいずれも破片である。

集石 2 からの出土は量的には多くなく図示したものは、1~5 である。5 は 1~4 より先行するものであるが、1~4 は第 1 号住居址の土器と同一時期のものである。

集石 3 からは、6~12 の出土がある。垂下する凹線で画された中に、縄文や綾杉文をもつものである。

集石 4 からは、13~16 を図示してある。集石 3 と同じ内容をもつ土器片である。

集石 5 からは、17~18 が出土している。17~19 は半截竹管状工具で刺突した連続爪形文が特長の中期中葉の土器である。近くにこの時期の遺構があり、そこからの混入と思われる。20~28 は集石 3、4 と同じ内容をもつ中期後半の土器である。

集石 6 からは、29~37 の土器片と第 7 図 13 の集石出土土器では器形の判る唯一のものが出土した。13 は口縁部径 11cm、最大胴部径 15.5cm、底部径 7.2 cm を計るもので、高台が付く。高台の下部が破損のため不明であるが、現存高 17.5cm の小形の深鉢形土器である。文様は垂下する唐草文状の隆帯で四区分された中が更に波状の沈線で二分され、綾杉状沈線がその間を満している。器外面は黒褐色、内面は灰黒色を呈して胎土、焼成とともに良い。なお高台には透かし穴があるらしい。中期末に位置される曾利 III 式土器に比定されるものである。29~32 は、区画文や抽象文で器面が飾られる中期中葉の深鉢形土器の破片である。33~37 は第 1 号住居址と同時期のものであり、33、34 は把手部片である。

集石 7 出土のものは、38~43 に図示したもので、第 1 号住居址と同時期の深鉢形土器の破片である。

集石 8 出土は、44~48 であり、集石 7 と同内容のものである。

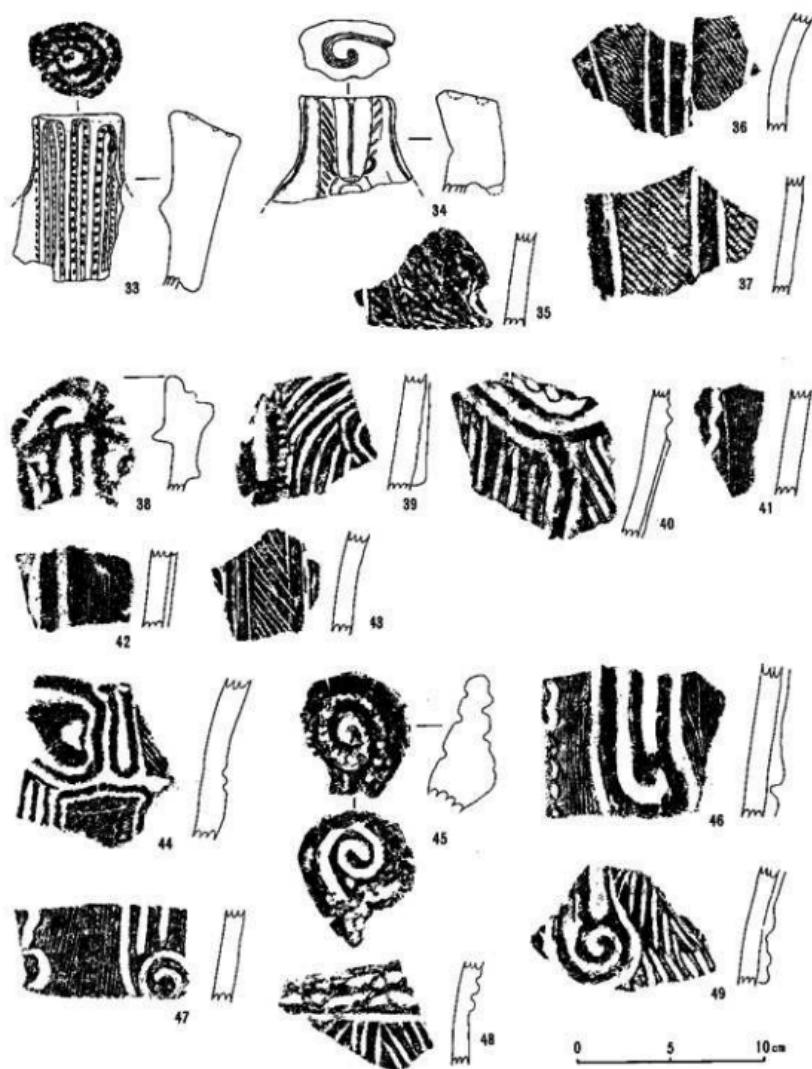
以上の出土土器の内容からして、明らかに混入したことが判る中期中葉の土器を除けば全て、第 1 号住居址と同内容の土器であり、同住居址廃絶直後に構築された集石と考えられる。

(小松牧俊)



第36図 東小倉遺跡集石2～6出土土器拓影 (1:3)

(1～5：集石2, 6～12：集石3, 13～16：集石4,)
(17～28：集石5, 29～32：集石6)



第37図 東小倉遺跡集石6～8出土土器拓影 (1 : 3)
(33～37：集石6, 38～43：集石7, 44～49：集石8)

11. 遺構外出土遺物

今回の調査で遺構以外から出土した遺物には土器、石器、石製品がある。

土器（第38図）は全て破片で器形の判明するものはない。トレンチ毎に図示したが時期差は見られず、また住居址や小堅穴出土の土器と同時期のものだけである。東小倉遺跡からは、前期や後期の土器の出土があったことが記載されているが、今回の地点ではそれが一片も見られなかった。

図示したものは、23片であるが勿論これ以外に相当量の出土があった。出土は遺構の周辺に多いが、中には1点の出土も見ない区がいくつもあった。

2、4、5、6、14、20などは垂下する凹線内に縞文を施したものであるし、3や5は短い沈線を刻んだものである。図示したものは10だけであるが、綾杉状の文様をつけたものも割合からいうと結構多い。また少ないが11のような沈線だけの無文片もある。8は底部片であり、推定底径6cmである。17は7.6cm、22は8.8cmほどの底部片である。23は把手部片である。これら土器片は曾利III～IV式期に比定される土器である。

石器には、打製石斧（第23図32～35、第24図36～47）、チャート製のスクレーバー（第20図8）、小形磨製石斧（第20図12）、凹石（第25図6～9）、磨石（第25図12～14）がある。打製石斧は短冊形と撥形が多く、石質は粘板岩が圧倒的に多い。これは付近に原石があるためであろう。34が砂岩製、40と44が泥質チャート製である。

小形磨製石斧は欠損しているが、硬玉質のものでよく研磨されている。凹石は、6と8が砂岩製、7と9が花崗岩製であり、凹みは両面にみられる。また6、7、9の両端には打痕がみられることから敲打器としての使用もあったと考えられる。磨石は13、14が砂岩で研磨されている。石製品としては、輪形耳飾（第42図11）がある。粘板岩製の径2.5cm、厚さ5mmのもので中央に1cmの穴があいている。細工途中のように感じられるものである。 （山田瑞穂）

12. 遺跡出土の炭化物と焼骨について

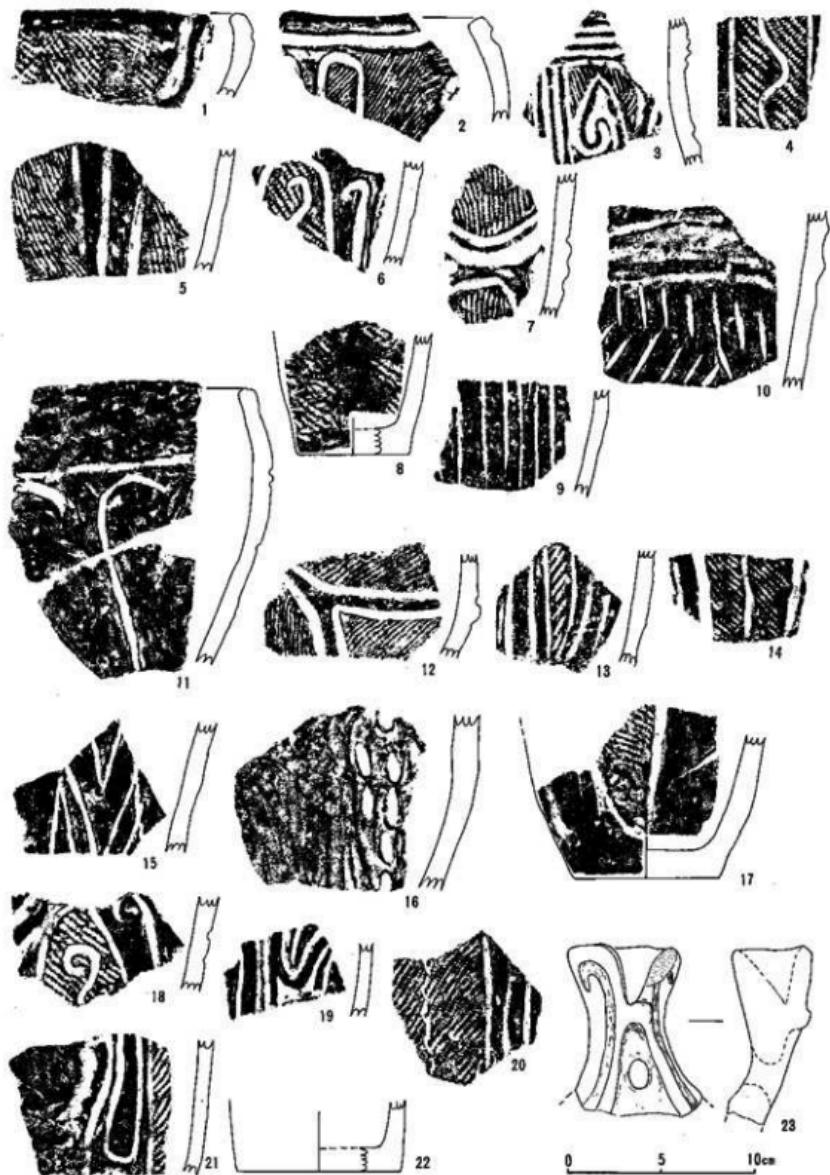
2号住居の炭片…クリ材・サワグルミ材

3号住居の入口のピット…コナラ材・ニホンジカの足の焼骨

3号住床面…ススキ（屋根材か）

土坑1…コナラ材・クリ材

以上が出土した炭化物の種類であり、当時の自然環境の一部がわかる。これ等の炭化物及び焼骨は、他の松本平周辺の山麓遺跡から出土するものと一致する。 （森 義直）

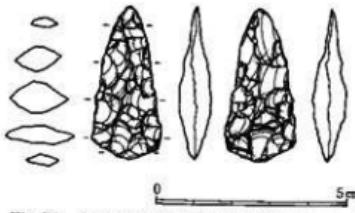


第38図 東小倉遺跡遺構外出土土器拓影 (1 : 3)
 (1~10 : Aトレンチ, 11~17 : Bトレンチ, 18~23 : Cトレンチ)

第2節 東小倉遺跡既出遺物について

1. 有舌尖頭器 (第45図)

有舌尖頭器は、基部に舌状の突起をもち、鋭い先端部をもつ扁平な尖頭器で、有茎尖頭器とも呼ばれる。今までに、先土器時代終末期の土器や隆起線文系土器、爪形文系土器等が伴って出土しており、土器が用いられなかった先土器時代と縄文時代の接点をつなぐ石器であることが日本各地の調査でわかっている。



第45図 東小倉遺跡探集有舌尖頭器 (1:1.5)
(堀内氏所蔵)

本有舌尖頭器は、今回の報告書作成時に、東小倉遺跡から堀内国利氏が採集された資料観察中に発見されたものである。南安曇郡内では梓川村八景山上ノ平遺跡から2本が採集されているのみで、本品は3例目となる。

欠損箇所が無い優品で、計測値は、長さ4.1cm、基部幅2.4cm、最厚部0.9cm、重さ5.3gを数える。石材はシルト質珪岩を用いており、にぶい黄褐色を呈している。この、シルト質珪岩は三郷村内からも産出される石材で、比較的入手しやすい石材であったことがわかる（三郷村木船清氏教示）。

全体のプロポーションは、長い二等辺三角形の底辺に短い逆三角形の舌状部がつく形で、木曾郡開田村柳又遺跡B地点から出土し有舌尖頭器の標識となった「柳又ポイント」に酷似している。断面は凸レンズ状で中央部が最厚となる。器体両面には押圧剝離が施され、調整は先端から基部に向かい入念に行われ、舌状部は舌方より行われている。器体側縁は細かなジグザグを呈し、交互剝離が行われたことがわかる。

先述したように、南安曇郡内では3例、2遺跡目の資料となり、中信地区でも松本市赤木山遺跡、塩尻市北ノ原・一夜窪・青木沢遺跡（長野県史遺跡地名表調べ）のほか、朝日村熊久保・氏神遺跡、山形村の各遺跡が知られているだけでその数は少ない。

新発見となった本尖頭器は、今まで三郷村は約8千年前の縄文時代早期からとされていた歴史を、縄文時代創草期（約1万年～1万2千年前）までさかのぼらせ、さらに有舌尖頭器の分布域を広げたこととなり、中信地区西山地域で今後新資料が発見され得る可能性を示している。

今後、出土地点の確定、発掘調査による文化層の調査等を通して、伴出土器の追究や該期文化の究明が進むことを期待したい。

尚、本有舌尖頭器の実測図は、財團法人長野県埋蔵文化財センター佐久調査事務所調査研究員近藤尚義氏の手をわざらわせた。記して感謝申し上げたい。
(青沼博之)

2. 土器 (図39・40・41)

多量にあるが、縄文時代中期中葉藤内I・II式期、中期後半唐草文土器I～IV段階のものが主体である。図39は、土器の深鉢、浅鉢片、図40・図41の上は、土器の深鉢の把手部分、図41の下は、土器の深鉢の底部である。

1・2・15は中期中葉藤内II式期のもので1・15は深鉢口縁部、2は浅鉢口縁部である。1は口縁部が波状になり、口縁部が小さく膨らんで半截竹管状工具により施文し、その下に押圧隆帯を横に貼り付け、その下には無文となる。2は、屈曲部に横に貼り付け、その押圧部に沈線を入れている。15は、環状の把手で、口縁部はやや盛上がる。周囲は、沈線、三叉文、交互刺突文などの施文である。

3・4・10・11・13・17・18・19・22・50は中期後半の唐草文土器III段階（曾利III・IV式期併行期）の土器である。3の口縁部は、キャリバー型の深鉢片で口縁部を渦巻の付く隆帯の区画文が施され、その中を縦の沈線文で埋めている。4は、唐草文土器に代表される壺型の器形の口縁部で隆帯の渦巻の付く区画とその中を交互刺突文を施している。10も4と同様の器形、文様で口縁部の一部である。11、13は、地文に綾杉文を施し、渦巻状の懸垂文をもつ胴部片である。17～19・22は、口縁部に2単位ないしは4単位に外に突出して付けられたと思われる把手で、19が刺突文と隆帯で施文されている以外は、沈線と隆帯で渦巻文などを施文している。50は、11、13と同様な施文の底部である。

7～9・12・14・16・20・21・23～49・51～56は中期後半最終末の唐草文土器IV段階（曾利IV・V式期、加曾利E式期併行期）の土器群で東小倉遺跡で採集されている土器の中で最も量が多い。

この土器群は、唐草文土器系の土器群（在地系で、長野県中南信地域に分布する土器群。綾杉沈線文および沈線文系、隆帯の懸垂文などが付けられる土器群）（12・16・21・27・39・46）、曾利式系の土器群（山梨県を中心に分布する土器群。沈線文主体（ハの字状沈線文が多い。）の土器群。）（9・43・47）、加曾利E式・大木式系の土器群（関東地方（加曾利E式系）・東北地方南部（大木式系）に分布する土器群。縄文を地文に施文する土器群。）（5～8・14・20・23～26・28・32・33・44・45がこれにあたり、しいて分けるならば5～7・14・20・24・25・28・32・33・44・45は加曾利E式系、23、26は隆帯を使用する点などから見て大木式系に分けられると考えられる。これらの中で31・33は後期初頭の称名寺式土器の施文に近い感じの施文であることから、この中でも比較的新しいものであろう。）の3種類に分けられる。

すべて、深鉢形の土器であるが、口縁部に付けられる把手は土器の系統を問わず、同じで塔状に付く把手が主体である。（中でも肩甲骨型に突出するものが多く見られる。）29・30・31の把手については下部の文様がわからないのでどの系統の土器であるのか不明である。

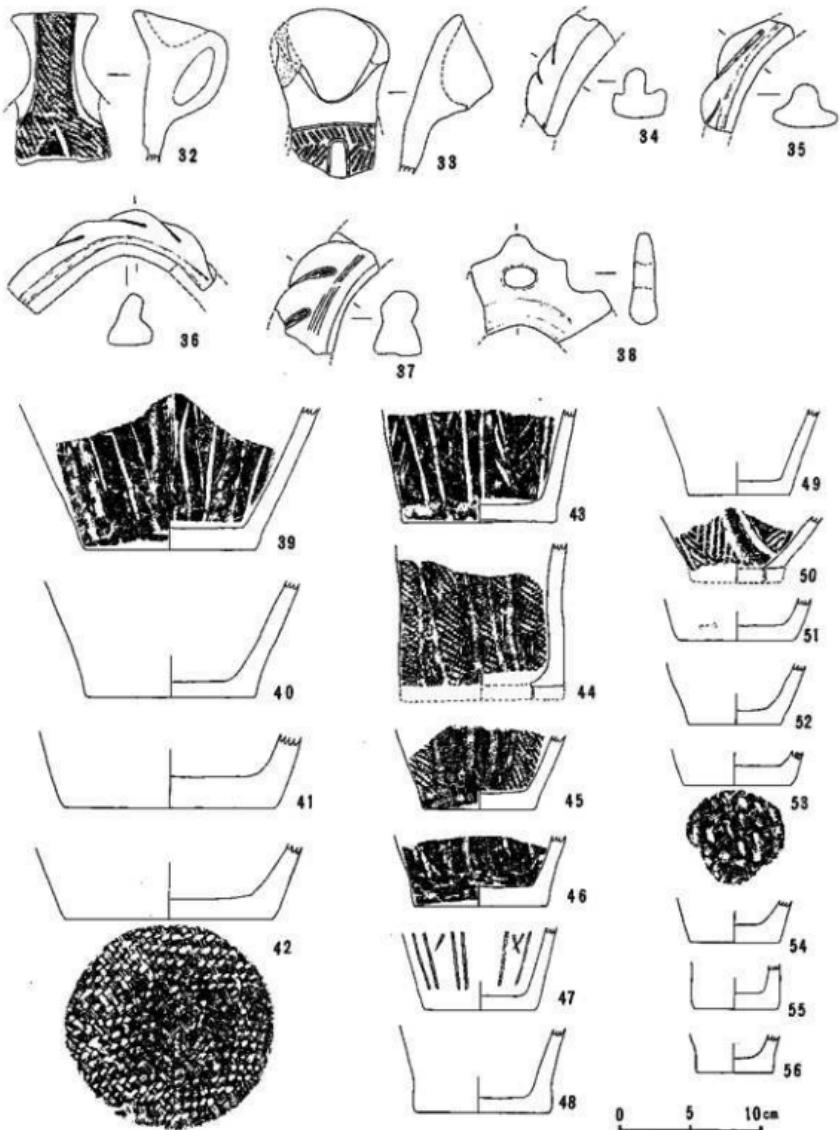
40～42・48・49・51～56は無文の底部でおそらくは、この時期に属すると思われるものである。42・51・53には網代痕跡が底面に見られる。



第39図 東小倉遺跡既出土器拓影その1 (1:3)



第40図 東小倉遺跡既出土器その2 (1:4)



第41図 東小倉遺跡底出土器その3 (1 : 4)

34～38は、長野県中南信地区を中心に中期終末～後期初頭に見られる深鉢の付く釣手土器の釣手部分である。34～37は二本の太い粘土紐を交差させたものを釣手部に張り付けたもので、38は粘土板状の釣手を縦に付けたもので頂上部に穴が孔けられている。

3. 石器（写真図版13～16）

石鐵、石錐、石匙、打製石斧、横刃型石器、スクレーパー、磨製石斧、凹石、石皿、敲打器、磨石など多量の石器が採集されている。特に打製石斧の量は極めて多い。今回の本報告においての既出の石器については写真で一部提示するにとどめる。

4. 石製品（図42）（口絵、図版12、16）

石棒（1・3～5）、石冠（6）、硬玉製大珠（8）、硬玉製玉の未製品（7）、硬玉質岩石の原石（10）がある。

石棒の1は砂岩製の無頭石棒で完形のものである。全長25cm、幅6cm、厚さ4cmで断面形が梢円形である。3～5は、有頭石棒で、3点とも比較的、頭の傘の部分が大きいもので、上半部分で欠損している。また3点とも断面形は欠損しているものの、ほぼ円形であったと考えられる。3は、点紋縁泥片岩製で残存する長さ12cm、頭の最大径5cm、胴の最大径4.6cmである。4は、砂質凝灰岩製で残存する長さ10.5cm、頭の最大径6.3cm、胴の最大径4.8cmである。5は、砂岩製で残存する長さ8cm、頭の最大径6.3cm、胴の最大径5.5cmで、断面形が厚さ3cmの板状に欠損している。

6の石冠は砂質粘板岩製の完形で、縦7.2cm、横9.8cmの鶴丸のやや台形で、断面形は、底面3.4cm、胸部最大幅4.4cm、上面幅1cmの丸みのある砲弾形である。

8の硬玉製大珠は、長さ10.3cm、最大幅3.6cmの經節形である。ほぼ中央に片側から穿孔した6～8mmの穴があいている。色は片面は白色が強く、他面は暗緑色である。

7の硬玉製玉の未製品は、縦6.4cm、横13.6cmのカマボコ形状の形で、厚さ2.2cmである。片面と周囲は研磨されているが、他面は、打ち欠いたままの状態で、おそらく大型の垂飾の未製品であろう。色は白色である。

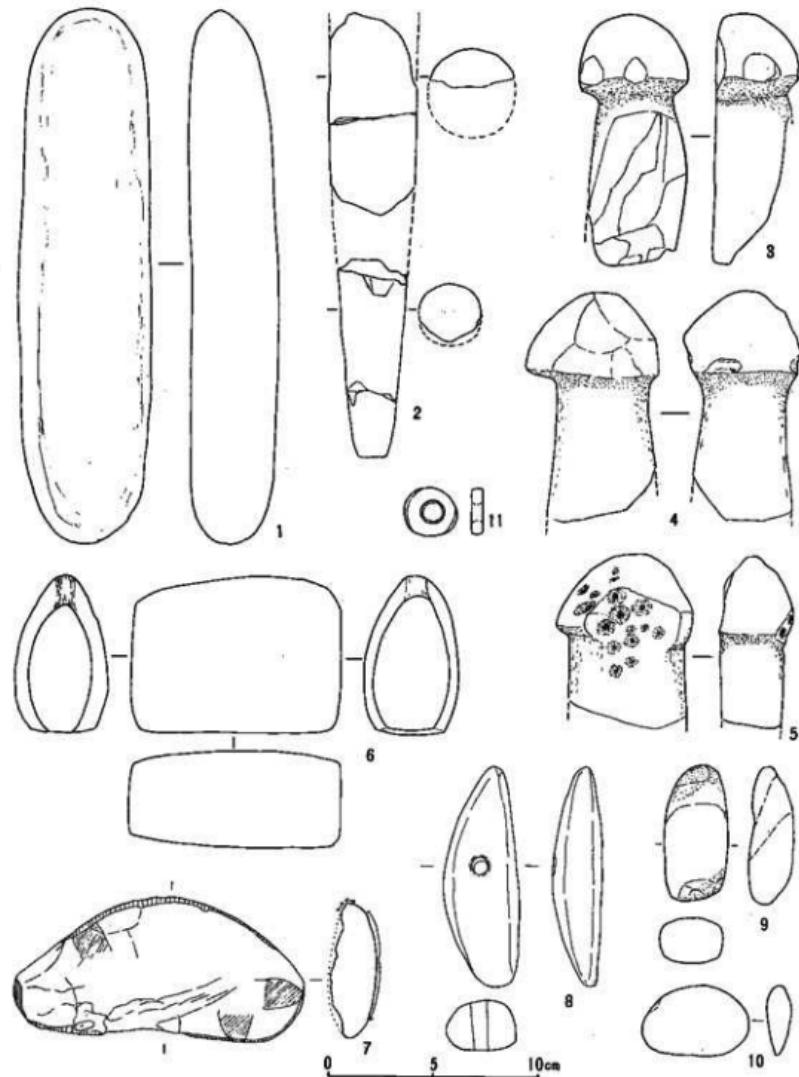
10の硬玉質岩石の原石は、縦3.3cm、横5cm、厚さ1.2cmで、加工の痕は見られない。色は、やや緑的な白色である。

5. 土製品（図43・44）（口絵、図版8、12）

土偶（図43・1～8、図44・1・2）、耳飾り（図44・8）、三角墳形土製品（図44・9）がある。

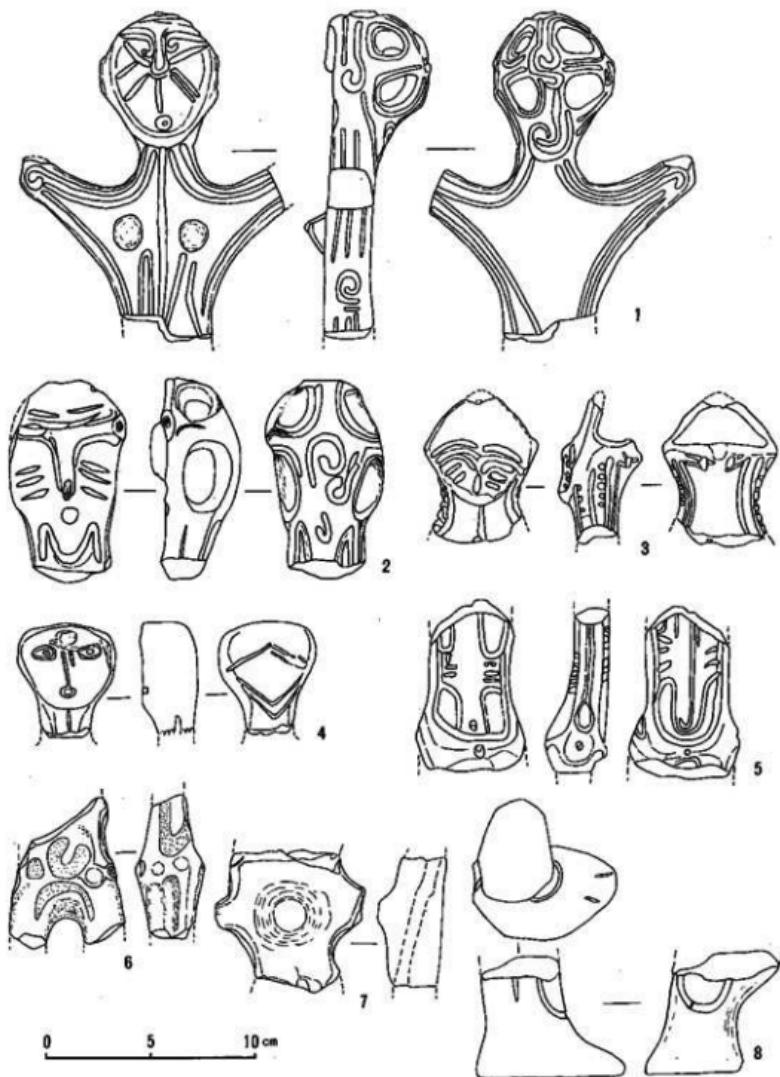
土偶は、一遺跡からの出土量としては比較的多いものである。

図43・1は、右手の先端を一部欠くが頭部～胸上半部が残ったものである。顔面は縦6.4cm、

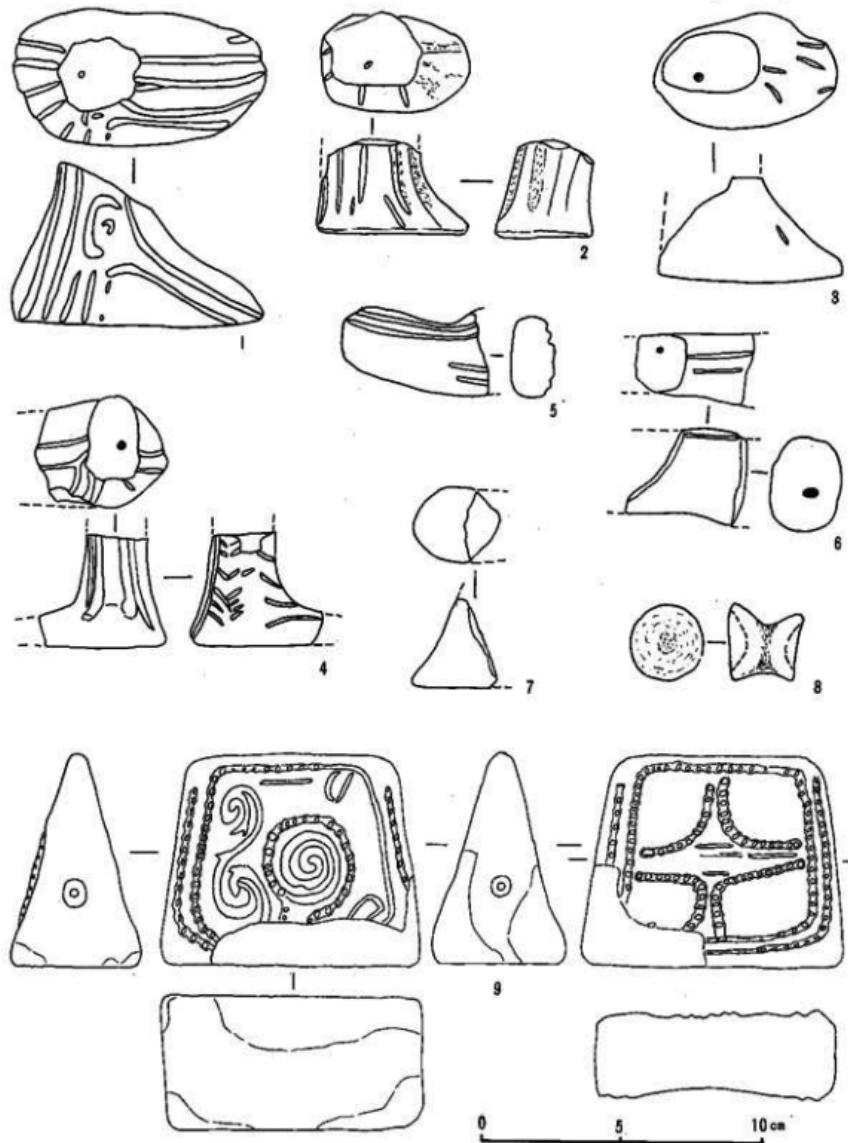


第42図 東小倉遺跡出土石製品（1～5・1：5, 6～11-1：2.5）

（1・3・4・5・6・10：堀内氏採集, 2：土坑1, 7・8：日比野氏採集, 9：AT-3, 11：CT-19）



第43図 東小倉遺跡出土土製品（土偶）その1 (1 : 2.5)
 (1 : 旗, 2・6・8 : 堀内, 3・4・5・7 : 日比野充夫)



第44図 東小倉遺跡出土土製品その2 (1~7 - 土偶, 8 - 耳栓, 9 - 三角埴土製品) (1 : 2)
 (1・9 : 日比野充夫氏採集所蔵, 2・8 : 堀内氏所蔵)
 (3・4・6・7 : 4住出土, 5 : AT-4出土)

横5.5cm、最大幅4.9cmである。眉から鼻はT字状に隆帯で、目・耳などは沈線の渦巻で、また入れ墨とも思われる文様が沈線で、口は刺突で施文されている。頭部～後頭部は、中空になるようにブリッジが十字にかけられ髪形を立体的に表現している。胸部は厚さ2.2cmの板状で、胸は径1.3cmで1cm盛り上がり、両手はパンザイ形態をとったものである。

図43・2～4は顔面のみ残るもので、2は1に顔面・後頭部とも似た表現である。3は顔面が隅丸方形で、頭部が広く、顔面表現は半分より下に沈線、隆帯で表現されている。眉はY字状である。頭部の頂上近くには穿孔の痕跡が見られ、後頭部は中空になっていたらしくブリッジの部分は欠損している。4は、板状で、目、口は刺突で表現されている。後頭部には細い沈線で菱形の文様がある。

図43・5は、胴下半部下部～腰部分で、尻部分がやや出張っており、沈線で服の文様が入れられている。

図43・6は胴下半部～腰部で凹線で文様が入る。尻部分はやや出張っており、脚部分はO脚となっている。

図43・7は、胴下半部でへそが出べそになっており、その両側が突出している。体内には芯とした棒の跡が残る。

図43・8、図44・1・2は脚部・足部分で、図43・8は、O脚の右足部分で、沈線の文様がわずかながら見られる。図44・1・2も右足部分で沈線で文様が入れられている。1は比較的大型のもので長さ8.8cm、幅4.8cmある。

これら土偶はすべて、おそらく、中期後半に属するものと考えられる。

図44・8の土製耳飾りは、滑車状で、片側径2.8cm、もう片側径2.4cm、くびれ部分1.8cmで、両側が盃状に凹んだ、無文のものである。

図44・9の三角塔形土製品は、縦7.5cm、上辺7.3cm、下辺9.2cmの台形で、断面形の隅丸三角形の底辺幅は4.7cmである。三角形の底面を除く、2面には沈線と連続する刺突文の文様が見られ、一面は、周囲を1～2本の線で囲みその中に渦巻や蕨手状のモチーフで施文している。もう一面は、周囲を他面と同じく1～2本の線で囲い、その中に八の字、逆八の字のモチーフを組み合わせて十字状のモチーフを施文している。三角形の中央やや下って横に穿孔が見られる。文様等から見てこれも中期後半のものと考えられる。

(島田 哲男)

第4章 結語

今回の発掘調査の発端は、土地所有者堀内氏の耕作中における石蓋付埋甕の発見にある。この重要性を考慮された村教育委員会は、県教育委員会文化課と連絡をとった上で、現地協議を行い、緊急に発掘調査を実施して記録にとどめることにした。耕作による埋蔵文化財の破壊を懸念しての調査ということで村の単独事業である。実施を英断された村教委、村当局に敬意の念を表すると共に、教育、学問、文化等による関心が極めて高い村民性の姿であることを感じさせられた。文化財保護と口では言い易いが、実践はなかなかむずかしい。それを実行された今回の調査から、文化財は自分達の手で守るという基本的な姿勢を示したものとして高く評価したいことをまず前段に記しておきたい。

さて、東小倉遺跡であるが、長野県史や三郷村誌では、黒沢川左岸遺跡と東小倉遺跡とに区分していたけれど、分布状況からして線引きがむずかしく、地続きであることから二つを総括して現在は東小倉遺跡と呼称している。村道514号線建設に伴って立合調査をしたことはあるが、本遺跡での発掘調査は行われていない。耕作中の出土遺物が多く、現在も何人かの人によって所蔵されている。

三郷村誌や県史に記載された出土遺物には、繩文前期（有尾式、上原式、下島式）、中期（梨久保式、勝板式、加曾利E式）、後期（堀之内式、加曾利B式）、晚期の各土器、石鏃、石槍、石匙、石錐、打製石斧、磨製石斧、敲石、凹石、石皿、磨石、砥石、四頭石斧、土偶、有孔大珠、有孔垂飾品等があつて周知の遺跡であると同時に遺物内容から研究者には注目された遺跡であった。本報告書の既出遺物の項に記されているが、更に石棒、石冠、三角錐形土製品の出土もあってその感を一層強くもつところである。

今回の発掘調査は、諸種の事情から一週間という短日程であったが、先章までの報告のように、繩文中期後半の竪穴住居址4軒、小竪穴1基、土坑2基、埋甕1個、土器片の入ったピット1箇所、集石8箇所とそれらに伴う出土遺物を得て、多大な成果を納めることができた。以下、東小倉遺跡についての新知見や問題点を記して、まとめたい。

まず新知見の一つに繩文中期後半の竪穴住居址等先記した遺構の検出をみて、該期集落の一端を確認したことがある。東小倉遺跡でのはじめての遺構検出であり、その点からも意義あるものである。遺構は既に説明された内容であり、他遺跡と同様なものであるが、注目したいものに、第1号住居址の炉縁石に立てられた石柱や埋甕と土坑1の炭化物及び焼けた石棒・石斧等がある。共に信仰的な内容をもつものとして受けとめられよう。そして集落の一端の露呈から、集落のあり方を推測するのは短絡的で早急とは思われるが、今後のこともあるので問題提起として、あえてここにとり上げておきたい。それは大事な遺跡の一つとして今後見守ってほしいという願いがあるからである。

今回の4住居址をはじめとする遺構は、東小倉遺跡では、東限に位置するものと考えられる。それは、4住居址が、調査範囲では西寄りのCトレンチ及びそれに近い箇所である微高地に営まれていることである。発掘時の所見でも黒沢川の氾濫を受けたことが判明しており、当時の人々とて安全な西方の高地を選ぶのが常道ではないかと思うからである。また、以前に東側の村道部分の立合調査を行ったことがあるが、何ら遺構の確認はなかった。そして堀内氏はじめ耕作者、遺物採集者の話を総合すると、石棒、埋甕、土偶、有孔大珠、三角墳形土製品等の遺物の分布範囲も、検出された4住居址よりは、南方から西方に及ぶことから、遺構の広がりは当然その方向が志向される。隣村の梓川村荒海渡遺跡を始め、この時期の集落は円形ないし馬蹄形に住居が営まれるところが多いが、本遺跡はどうだったのであろうか。そして先記したように、本遺跡からは、前記の有尾式、上原式、下島式、中期の梨久保式、勝坂式、加曾利E式、後期の堀之内式、加曾利B式や晩期の各土器片の出土が知られているが、今回調査では、加曾利E式（曾利II～IV式）土器を所有する時期のみで、ほんの少量、先行する勝坂式土器片をみたのみである。先行する内容や後続する人々の訪れがあるわけであるが、それらの人々の住居（集落）はどうであったのか、今回の発掘調査では全く手がかりを得なかった。曾利期の本遺跡での集落のあり方とこれら先行・後続する遺構の追求が本遺跡の重要課題であることをここに記しておきたい。

次に出土遺物についてである。今回調査で得たものと既出のものを含めて先章迄に記してあるが、豊富な内容であることをまず第一に感じる。わけても既出遺物に見るべきものが多いことである。重複するきらいがあるので、ここでは注目したい遺物について列記したい。

- 1). 土器は縄文と綾杉文とが圧倒的に多く、器形では深鉢形が多い。全体的にみると粗雑な感じであることが、胎土、焼成、施文等にみられ、表面がざらついたものも多い。
- 2). 吊り手土器の吊り手部片の出土が多い。第1、第2、第4号住居址、小窓穴1、土坑1からの出土で、吊り手部の形状・施文に多様さがみられる。
- 3). 堀内氏採集遺物の整理中に有舌尖頭器を確認し、東小倉遺跡は縄文前期より更にさかのぼって、創草期に人々の活動の場となったことが判明した。三郷村への人々の訪れは縄文早期からであるという今迄の見方を変える資料となったわけであり、今後更に発見される可能性があるので注意したい。
- 4). 打製石斧が極めて多いことが本遺跡の特長である。石質は粘板岩が圧倒的に多いが泥質チャートが若干混じっている。共に黒沢川周辺に産するもので、手に入り易い石である。打製石斧は数百点に及び、工房址があったのではないかと思われるほどであるが、今回調査では、それは確認し得なかった。

石鏸は全体的に少なく、凹石、磨石、敲石が多いという傾向がみられる。

- 5). 土偶の出土が多い。中でも頭髪の結い方を示すのか後頭部が十文字に表現された特長あるものが二点出土して注目される。目の下に直線を施してあるが入墨を表すものだろうか。既出

遺物のため所属時期は明確でないが、作りや出土地点から考えて、曾利期におきたい。他遺跡と同じように土偶の完形品ではなく、今回調査でも手・足部の出土があった。大きな足部の出土が多い。

6). 土偶の他に土製品では、三角彫形土製品がある。県下での出土例は少なく、松本平では明科町のホウロク屋敷遺跡と塩尻市の横沢遺跡での出土が知られるだけで、南安曇でははじめての資料である。ほぼ完形の優品である。これも既出採集資料であるため所属時期不明であるが、文様から判断して曾利期に位置づけられよう。

7). 石製品として、石冠、石棒、有孔垂飾品が注目される。石冠、有孔垂飾品はよく研磨されて光沢をもち優品である。これらも既出資料であり、特に石棒はどのような遺構をなしていたのか不明で惜しまれる。また今回調査では玉の未製品であるヒスイが出土した。このことは原石を持って来て、こちらで作製することを示すものではないかと考えられる。

以上出土遺物について、新知見や注目すべきことについて列記したが、信仰的・精神的な内容をもつ遺物が多いことがうかがわれる。この時期は他遺跡でもこの傾向がみられるが、本遺跡ではその感を更に強くもつ。また土坑1からは有機質分を多量に埋めたと思われる漆黒色土と共に火熱を受けた小型定角式磨製石斧、割った石棒、鹿の骨片、中型哺乳動物の骨片等が出土して信仰的儀式の行われたことがうかがわれる。如何なる目的をもったものか定かにする資料には欠けているが、死者の靈を葬る場、生産活動（狩猟採集）の豊潤を願ったり感謝する場等の呪術的な祈りの場であったものと考えられる。

以上発掘調査をふまえて東小倉遺跡について新知見や問題点を記したが、その重要さは増すばかりである。二次・三次の調査が行われて、遺跡の全貌の判る日が近いことを願ったり、耕作による破壊を極力控えるように努めたりすることを記してまとめとしたい。

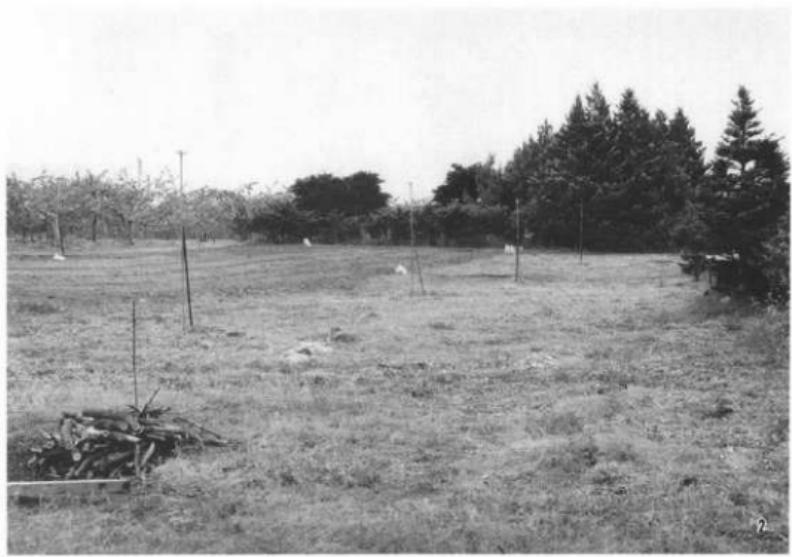
種々配意いただき、お世話、お骨折りをいただいた村教育委員会や発掘調査に参加された皆様に調査団を代表して、心から感謝とお礼を申し上げる次第である。また報文中にも記してあるが、埋文センターの青沼博之、近藤尚義両先生にご協力いただいた。記して感謝申し上げたい。

(山田瑞穂)

図 版



1 遺跡遠景（西方室山より）



2 遺跡近景（南より）

图版 2



1 1号住居址



2 1号住居址 炉址



1 3号住居址



2 4号住居址 埋甕出土状况

图版 4



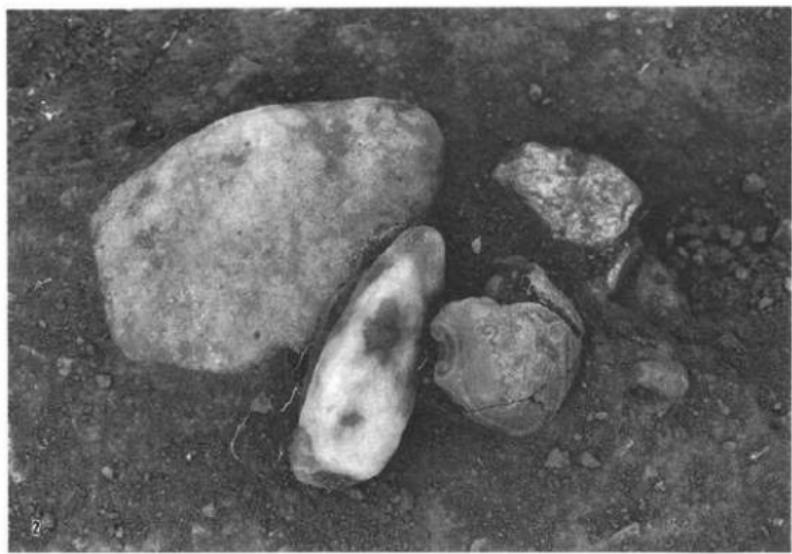
1 屋外埋甕周辺



2 屋外埋甕出土状况



1 土坑 1



2 集石 6 遺物出土状況



1



3



2



4



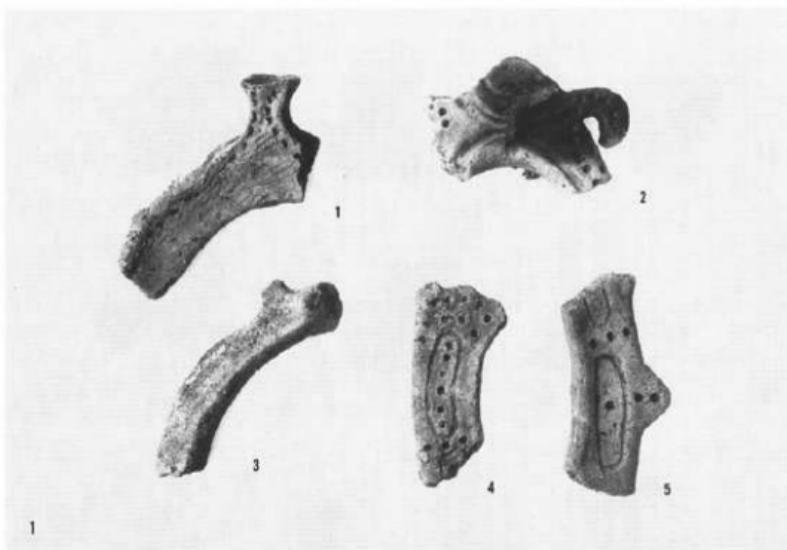
5

出土土器 (1 : 3)

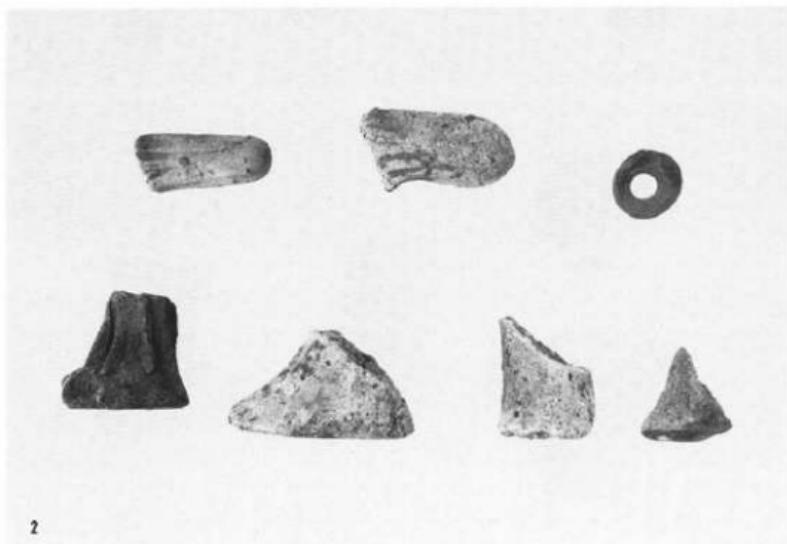
1 屋外埋甕

2、3、5 1号住

4 集石 6



1 出土土器 (1 : 3)
1、3、5 小堅穴 1 2、4 2号住



2 出土土偶他 (1 : 2)



1



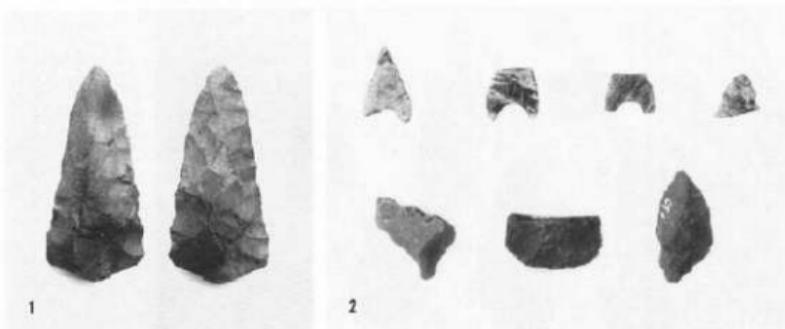
2



3

土偶

1~3 既出土偶 (1:3)



1

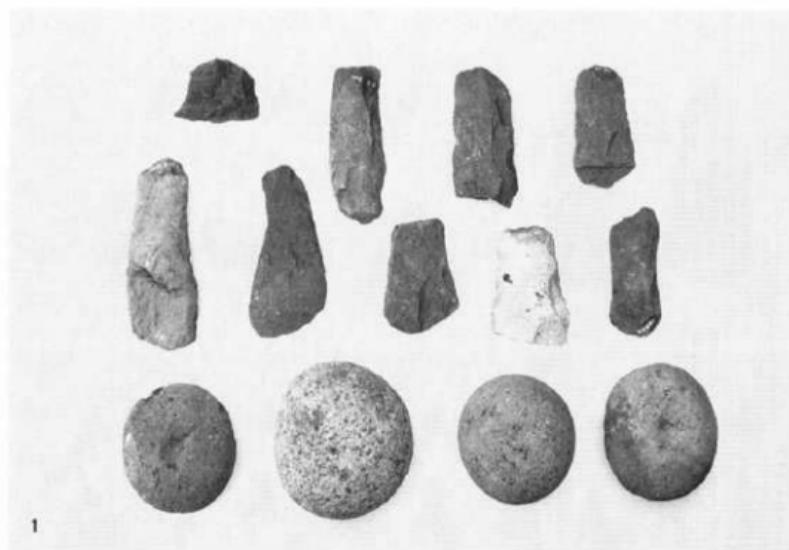
2

3

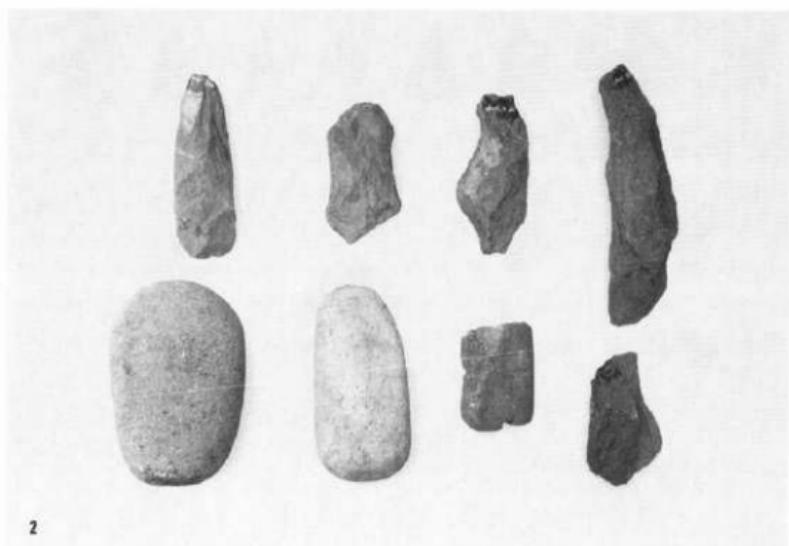
4

出土石器

1 有舌尖頭器 (既出 1 : 1) 2 出土石器 (1 : 2) 3~4 斋出石器 (1 : 2)



1

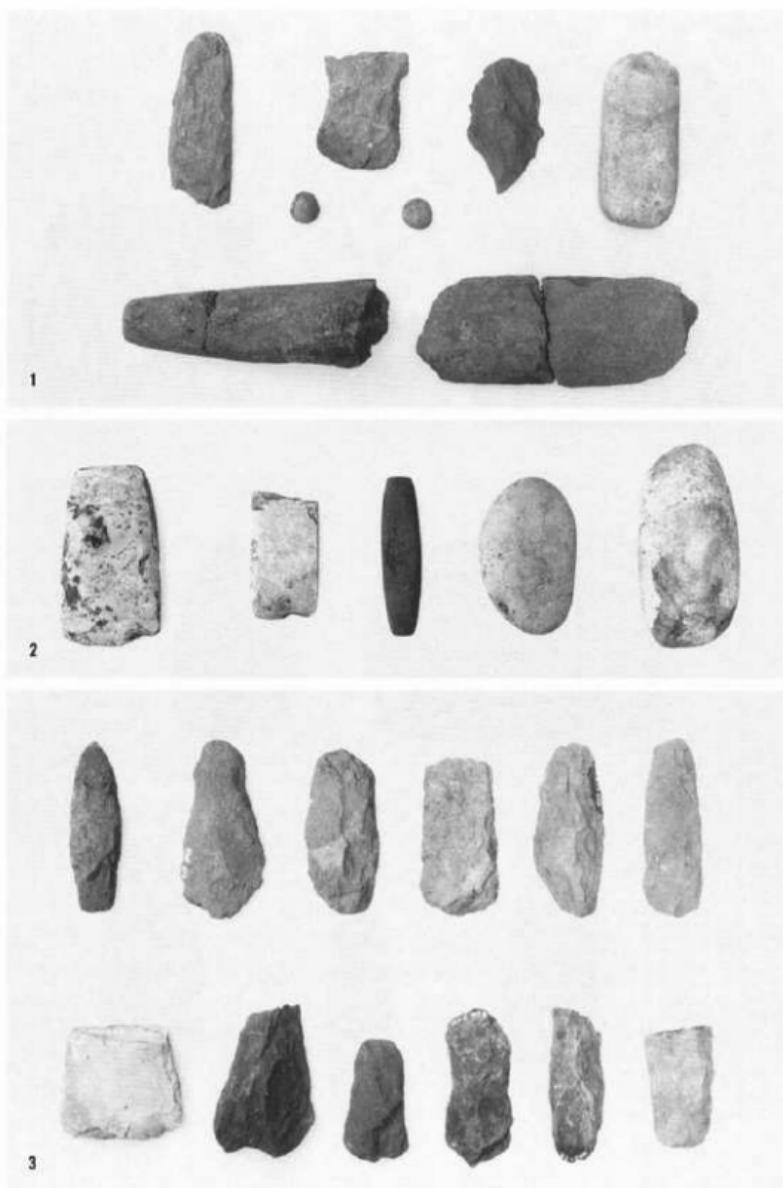


2

出土石器

1 2号住居址出土石器 (1:4)

2 4号住居址出土石器 (1:4)



出土石器

1 土坑1出土石器 (1:4) 2 出土石器 (1:2) 3 トレンチ出土石器 (1:4)



1



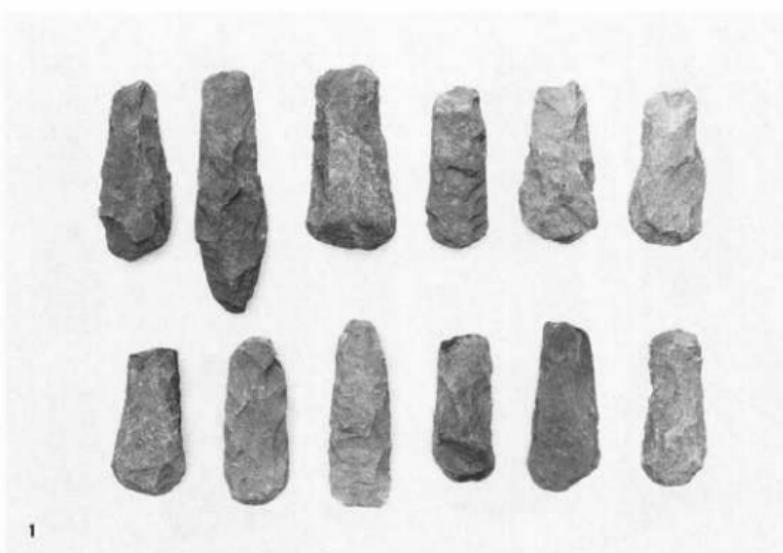
2



3

土製品及び石製品

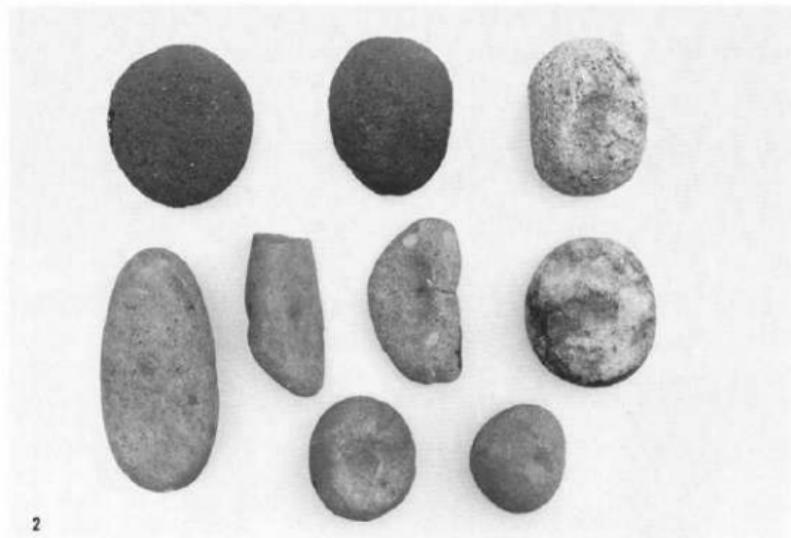
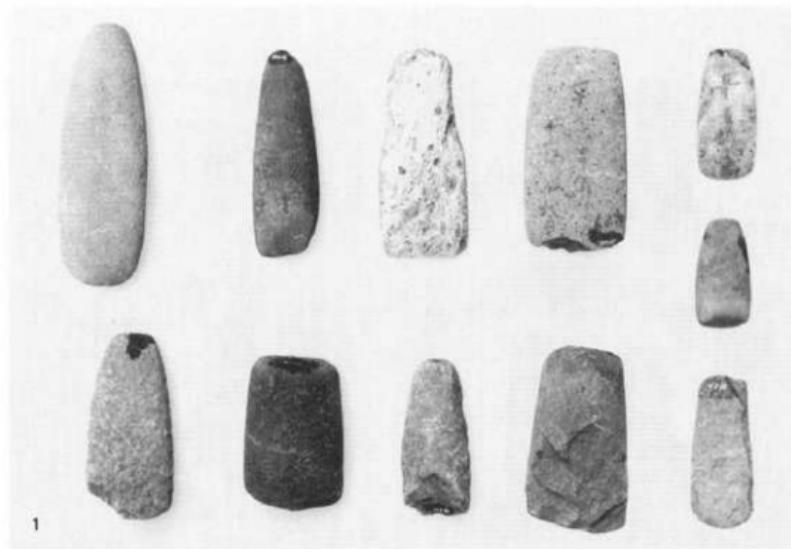
1 三角埴土製品（約1：2） 2 石冠（1：2） 3 垂飾（1～3度出）



出土石器

1 打製石斧 (既出1:4)

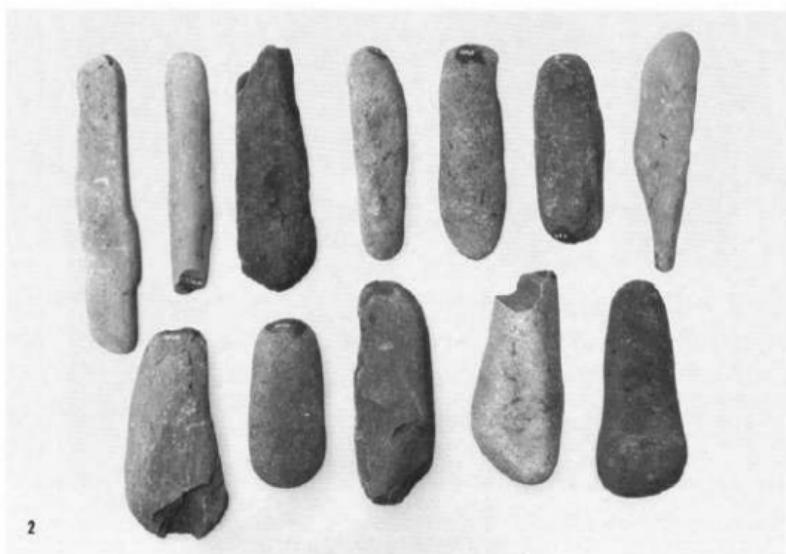
2 打製石斧 (既出1:4)



出土石器

1 磨製石斧 (既出1:4)

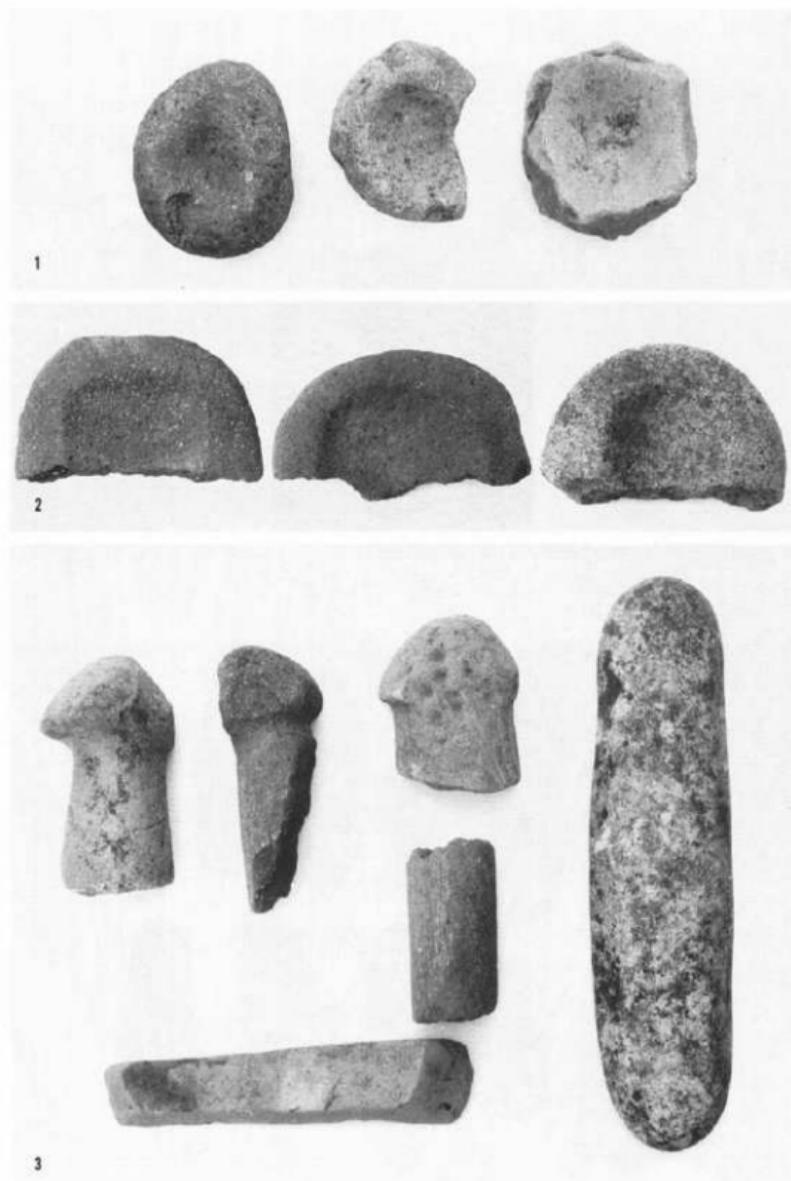
2 凹石·磨石 (1:4)



出土石器

1 研石 (概出1:4)

2 磨石 (概出1:4)



出土石器及び石製品

1 大形凹石 (既出1:4) 2 石皿 (左 土坑1出土、既出1:5)

3 石棒 (既出1:5)

三郷村の埋蔵文化財第2集

東小倉遺跡

平成7年3月28日 印刷

平成7年3月31日 発行

編集発行 三郷村教育委員会

印 刷 藤原印刷株式会社

